
IS 魔法使い転生者in IS world

シャラシャラン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 魔法使い転生者 1 IS Word

【ZIPアーカイブ】

Z3371X

【作者名】

シャーラシャーラン

【あらすじ】

あつ…俺死んだのか

え、他の世界にいけるの…!?まじで…?…?そんじゃ俺は…此処へ…!

え、チートも…?まるでどつかの一次小説みたいだな…まあいいや、いつちよこきますか…!…!

このお話は基本原作ですがリジナルもいれていきます。たまにキャラ崩壊などがありますが気にしない方はどうぞお読みください

さいー！意味不明な事も出てきますが気にしない方はお読みください。

ちなみに更新は不定期です。

スミマセン……

でもなるべく速こよひしますーー！

プロロ・グ 死んだ…の? (前書き)

初めてですーーー!

誤字や脱字があったら教えてくださいーーー!

ではどうぞーーー

プロロ・グ 死んだ…の?

「はあ、きょうも学校疲れたな…」

俺はいつも登校と一緒になじんだ道を通りていた。商店街を通り地下鉄に乗り家から一番近い駅に帰る。

あ～家帰つたら何しようかなあ～。宿題は無いし新しいゲームを買うにも金わざなすぎるし。あつ電車来た。

ん～

「あつ、家帰つたら昨日買った小説の続きを読もつと」

うし決まり。あ～家の駅に着くの時間があるし寝るか…おやすみ

zzz

「ふああー、ついた」

寝ぼけながらも進む俺

そしていつもどいつも横断歩道を渡ろうとしたとき

「え？」

世界が反転した

「嘘…だろ？」

その後俺は道路際に投げ出された。グシャっと嫌な音がしたがそんなおかまいなしだ。それよりか今自分がどんな状況なのか知りたい。だがすぐにそれを説明する物をみつけた。

「こ…れは、血？」

嘘だろおいおいおいおい。先生の言つてた事つて本当だつたんだな、一定した痛みを超えたなら痛みが無いのって。

俺死ぬのか？

(まだ、生きたいか?)

あたりまえじゃねえか、まだ俺学生だぞ?

(まあ今日は私も悪いからな……今回だけだぞ?) 一一ヤツ

「えつ?」

目の前は真っ白だった。下も上も右も左も真っ白。

「どこだ……ここ」「ようこそ」-? -? -?

後ろを振り向くと和服を来た人がいた。

えつ? 和服?

「生と死の狭間へ」

そしてそいつはノンキに紅茶を飲んでいた

プロローグ 死んだ…の? (後書き)

今回は短めにしました!!

これから愛読をお願いいたします

プロローグ2 俺、転生します（前書き）

いは

二回目です

みじくお願ひいたします

プロローグ2 僕、転生します

俺の目の前にいる人（？）はきれいな紺色の和服に身をつつみ、高級そうなカップで紅茶をオフィスチェアで飲んでいた。

……なんというかシユールな風景だ。

その人はキレイなブロンドヘアを腰あたりまでたらしていた。

いや、それよりか気になる事がある。

「…………どうだ？」

そり、俺はさつき車に跳ねられて道路際に投げ出され死んだはず

そう

死んだのだ

はあつ、つとブロンドヘアの人人が溜息をつく。

「だから言つただる。ここは生と死の狭間だよ」
「やっぱ俺、死んだのか？」
「ああ、そうだ」

ズズッと紅茶をのむ。

あつたり言われた。

「つてかその前にあんた誰！？！？」

「神様だ」

「か、神様あ～？」

へ、へえ～

か、神様つていたんだね

「いやいるぞお前の田の前に」

「心読まれた！？」

「ああ読んだぞ。何たつて私は神様だからな

「もういいよ信じるよ」

ガクつとうなだれる俺

「…すまないな」

「え？」

「いや、今回お前が死んだのは私のせいなのだ

え？

「 そうだうつかり私の弟子の【見習い神様】が死のノートの書き間違いをしてしまったのだ。」

本当にすまない」

「え？いや、そんないいですよ」

「 そのかわうと言つてはなんだが他の世界に飛ばしてやる、あとチートも」

「え、まじで？」

思いつきり顔を上げる俺。

最後す”い事をサラッと言つたよな

「うん、まじで」

何だこのどつかの一次夢小説みたいなお話は。ってか本当にあったんだな転生とチートってあつたんだな。

「で、どこ行きたい？一次元もオッケーだぞ」

えつそうなんだ

そうだなどこに行こうかな…

緋〇のアリアもいよいよな、あと銃〇とか……あつ、とある〇書もいよいよな

「うーん」

「まつまつは、なやめ若者」

一時間後

「うーん」

「やっぱなやむな、長い！いい加減早く決めひー！」

「だつてよそれで俺の第一の人生の背景きまるんだぜ」

「いやそうだけじゃ、さすがに悩みすぎだ」

「うし、決めたぞ

「よし何処だ」

「俺はHISの世界に行くぜー。」

「はあ、やつときましたよ」ヤレヤレ

「次はチートだな」

「ああそりだ……時間をあまりかけるなよ

「いや大丈夫だ。もう決めてある」

「ほうでは聞こい

「まず身体能力向上だろ。その次にティ○ズオブシリーズや他の魔術と剣術をたのむ」

「ふむふむ」

「あとせつかくHISの世界に行くんだからHISを乗れるようにも

しといてくれ」

「あ、それは大丈夫だ」

「え？」

「それはE.Sの世界を選んだときについてくる特典だ」

「あ、そうなんだ…

んじゃ想像した武器を実体化する能力をくれ」

「すごい発想だな…チートすぎるだろ」

「え、だめなの？」

「いや一応オッケーだ
オッケーなんだ…

「あとE.Sの知識をてんこもりにくれ

「了解つと、それだけか？」

「なんだ？まだいいのか？」

「まだ容量的にあと何個か大丈夫なんだが」

「いやもういいや。あと適当に良いやつとめといで。あ、でも変な奴入れるなよ」

「はいはい、わかりましたよ」

(ふふつ、な・に・を・入れようかな)

「よし、うちのチートは準備ができたぞ」

「うし、行きますか」

「名前とか自分の個人情報やチートの事は頭の中と端末の中に入れておいたから、後で全部チェックしようよ」

「うるさく。」

「んじゃ準備はいいか?」

「イエス サー！」

「んじゃ、いつぐそ～。エイ」ポチッ
ガコン

は
?

いきなりの音にびっくりしたがそれよりかビックリした事がある
俺の足元に穴がある

「アーディオース！」

「ロヂヤル」

そして俺は何処までも暗い闇の中を落ちて行った

と、思いきや

「あれ？」

目の前には木製のドア。
右には勉強机。
その隣にノートパソコン。
反対側には本棚。

いわゆる普通の部屋だった

「どうだ、いい

チャイムがなつた

プロローグ2 俺、転生します（後書き）

今日は前回よりか長く書きました

いや～書くの楽しいですね

設定（前書き）

まだ未定のところもあるので短いです

何かいいアイデアがあったら教えてください

設定

平崎 勇也 (ひらさき ゆうや)

年齢	15歳
身長	178cm
体重	70kg

髪型は紺弾のアリアのレキの髪型の黒色で、顔は中性的な顔立ちで髪が長かつた頃はよく女性と間違われた。それにより髪をバッサリ切つた。目は茶色。

前世のときは大学生であったがE.S学園に通いたいので年齢をさげてもらつた。

趣味は音楽観賞や本を読むこと。実は昔色々な格闘術をかじつていたため、白兵戦ではかなりの実力を発揮できる（一部チートのおかげ）

チートにより神様から身体能力向上、E.SとE.Sの知識や、テイルズオブシリーズと他の魔法や剣術を頭にたたきこんでもらつた。他に頭の中で想像した武器を実現させるという能力を持つている（自分で言いながらもちょっとチートすぎると思つて）いる）。発動したときにしか使えない。

まだまだチートはいけると言わされたが、神様にまかした。残りはかつてに神様が入れた。

性格

明るく他人とのコミュニケーションを好む。相手がどんな人だろうと気安く話しかける。

ちょっと天然、そして天然たらし。（一夏よりかはだいぶまし）

専用IIS

?????

設定（後書き）

これが設定です

他にいい案があったら教えてください。

第一話 いや、~~お~~圓く（繪書も）

はい

原作にやつとちがずきました

第一話 いや、学園へ

へえ～ここが俺の家か…

俺は神様に植えつけられた記憶を頼りにし家中を歩いていく。
一人部屋とゆう設定らしい。

ピンポン

あ、でもマンションなんだ。
にしては広いな

ピンポン、ピンポン

あつたこれが端末か後でチェックするか
チートってどんな感じなんだろうな、やっぱテイルズの魔法だから
手から火とか出るのかか

あ、こんな事している場合じゃなかつた、チャイムが鳴つてゐんだ
つた

ピンポーン、ガチャ

「はー」

「出るのが遅い。」

あ、この人は……

「まあいい。君が平崎勇也君か？」

「は、はい。あなたは……」

「織斑千冬だ。キミのクラスの担任の教師をすることになつて
る」

やつあのHISの世界の中で最強の称号を得たあの織斑千冬だ。

とこつ事は俺は無事にこつちの世界に来れたとこつことだ。

何というか、あまりシックリこないような

「何をほうけている。行くぞ」

「え？..どこに？」

「何を言つている、 HIS学園だ」

そうだつた俺は HIS が乗れる事になつて いるの だつた。
え？でもそれだつたらバ レル 理由 なく ない？

(それは私が政府に差出人不明で手紙を送つたからだ)

「の 声は..！」

(そうだ私だ。神様だ)

お前、よくもあのときは…ビックリしたんだぞ！
あんな事があるんだつたら先に言えよ！

(ままいだる。それより先に状況説明をするぞ。今日は4月1日
で始業式だ)

始業式？

(そうだ。お前は現在二人目の男性のETS操縦者として世間に知ら
れている)

え？ まじで？

(ああ、そうだ。だから織村千冬が迎えにきたのだ、人が群がらな
いよう)

なるほど

「おい、何をしている。はやく着替えてこい」

「あ、はい」

(制服はタンスの上から一番田のところに入ってるが)

ん、ああ、ありがと

そういうえば何で俺らは声を出さずに喋れるんだ?

(私とお前だけの間のテレパシーだ)

そんなことどうかねんだな

「よし着替えたな

いかにもできる女、織村千冬が言つ

「はー」

「では行くぞ」

「え？ 織斑さん貴女が運転するんですか？」

「ああ。後織斑先生と呼べ」

「了解しました」

俺達は快適にドライブをし学校に向かった

俺は会話をせずずっと端末と記憶を照らし合させていた。

そんな中先に口を開いたのは織斑先生だった。

「そういうえばお前は専用工房を持つていると資料に書いてあったのだが、本当なのか？」

やはつもうびこかの企業に属しているのか？」

「あ、いやどうにも属していません」

「ほう。ならなぜ工房を持つてこる？」

「.....」

「どうしようか答へよう。

さすがに神様にもりこましたつていたら笑われるだろうか……

でも何て言おうかな先に吐いちゃおつかな
そっちの方が楽だし

うわせじゅうじゅう

(あつせつ決めたな、オイ)

「後でそれについては説明しますので待ってください」

「……わかった」

「オすんなりオッケーしてくれた。」

IDS学園

「んん~、やつとついた」
背伸びをしあぐびをする

「行くぞ、ただでさえ時間が押しているんだ。
お前は始業式にすら出ていないんだぞ」

「はいはー」

ヤレヤレとて手を振る

「はいはー回でいい」

うわ思いつきり睨まれた、怖

「は、はい。すみません」

「わかつたらなさい、行くぞ」
そして踵を返し歩きだす

こりや、主人公がビルのもわかるは。
鬼だこの人は、人の皮をかぶつたおにだ。

一年一組前

「ここで待つてろ。呼ぶから後で入つてこい」

「わかりました」

はあ、やつとだ

これから俺の第二の人生が始まるんだ

「よし、入つてこい」
織斑せんせいが言った。

よし行くか。

そして俺は新しい人生の扉を開いた

一夏 side

はあさつきの自己紹介はまずかつたかな？…
しまいには千冬姉にぶたれるし

はあ～不幸だ

「ではあと一人紹介する。」

「え？あと一人いるんですか？」

副担任の山田先生がきく。

「ああ、例の一人目の男のIIS操縦者だ」

え？あと一人いるのか？

これはうれしいことだ何たつてこの人数の中で一人だけの男子だからな

後ろからの視線もいたい。

共感できる仲間が増えることはうれしい

「よし、入つてこい」

ガチャツ

「平崎勇也ともうします。」

これから始まる物語に

その物語を知る者が入った

そしてだれも知らない物語が始まる

第一話 いざ、学園へ（後書き）

はい
終わりました

第一話 言わせねーよ

「平崎勇也ともうします。趣味は音楽鑑賞と読書です。これからよろしくお願ひいたします」

そして行儀よくおじぎ

۱۰۷

（は！耳を閉じる勇也！）

なんで？

(お前は知らないのか？原作を読んだ事があるんだ！)

み、耳がああああああああああーーー！
こ、これはソニックブーム……恐るべし

（言つただろ？次は気をつけろよ）

あ、ああ。絶対に気をつけるよ

「平崎、お母の席はあれ」だ

そして指を指されたその先は一番後ろだつた

ラッキー

「あと、愚弟だがアイツをよろしくたのむや」

「弟さんが心配だつて素直の言へば言へばこゝじやないですか」

スパアアアンツ

い、痛いこれは本氣で痛い
つ、次からはできるだけ身内ネタでいじるのはやめよつ

「さつさと行け」

「は、はい」

容赦ないなこの人

「や、ショートホームルームは終わりだ。諸君らには、これからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなぐても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

本当に鬼教官だな、織斑千冬は。

只今一時間目の後の休み時間

後ろからの視線が痛いです

本当に、ウーパールーパを見るような目で見られている
まあいいか。

この原作の主人公に話しかけますか

「なあ、君が織斑一夏か？」

「ん、ああそうだけど」

あ、なんかちょっとグッタリして

「わざわざ自己紹介したと思つが平崎勇也だ。下の駄前で呼んでくれ」

「織斑一夏だ。一夏つてよんでくれ」

「よろしく。しつかしあ互い災難だな」

「ああそうだな。……それよりわざの授業の内容意味わかつた

？」

キュピインツ

こ、これは原作の内容だな

まあここは……

「当たり前だろ。知らないとこの先不便だぞ」

神様、チートをありがとう

「そ、そつだぞな。」

ははつと、乾いた笑い方をする

「……ちゅつと、いいか？」

「「え？」

お、でたな篠ノ之篠

「篠？」

「少しこいつを借りてもいいか？」

まあ当然答えは

「あ、うん。いいですよ」

そして連れ去られて行く一夏

さあもうすぐ授業だから席についておきますか

「…であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ…」

スラスラと教科書を読みあげる副担任の山田先生

ペラペラとページをめくり、意欲を削ぎ落されたような顔をする一夏

駄目だなアイツ

「先生…」

「はい、織斑くん！」

「ほとんど全部わかりません」

「「え？」」

さあすがにビックリした。そういうこんなストーリーだったな

「織斑くん以外で、さつきの話はわからないっていう人はどれぐらいいますか？」

シーネン

「え！…勇也も！？！？」

「当たり前だ。今の段階でわからない方がおかしいぞ」

はあつと鬼教官が前にでる

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

バシイイイン

「必読と書いてあつただろうがバカ者」

ふふつ

バー カバーカ

「それより平崎、なぜお前は知っている？」

「え？」

まさか話がふられるとは思つてなかつたので変な声をだす

「お前は入学が急で参考書は行つていなければ」

ヤバ、どうしようもやピンチ

本当にこの人には先に吐いておいた方がよさそうだな

「あ、は、はいあのちょっとパソコンで自主学習を……」

どうだ！通つてくれ

俺のウソオオオオオ！……

「そうか。お前はまだ『イイツよりはましそつだな。織斑再発行してやるから一週間で覚えろいいな?』

「い、一週間ですか？」

「やれと言つていい

「……はー」

アイの鞭だ、いや脅迫か

只今一時間目の後の放課後

先ほどの話は山田先生が補題を一夏にすること終わった

そしてまあ今一夏と会話をしているわけだけど

「訊いてます?お返事は?」

「イツがいるのだった

セシリ亞・オルコット
イギリスの代表候補生だ

そして今一夏がそれについて質問をしている
代表候補生の意味知らないのだ

そしてセシリ亞が答えようとする

「国家代表、国家代表IS操縦者の、その候補として選出される
エリートのことだ。」ちょっと邪魔しないで頂けますが!?!?!

?」

そこを早口で俺が説明する

なぜだかコイツは小説で読んでても気に入らなかつた

ちょっとこの先いじつてやるか

そしてちょうどいい所でチャイムがなった

どこに逃げるんだと

「なあ勇也」

「ん？ なんだ？」

なんかいらぬ恨み買つたんじやのか？」

「そんな事ないよ」

そして俺は席に戻った

まだ後ろを向いていた一夏は出席簿アタックをくらった

「再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める」

教壇に立つた瞬間言い放つた

「はい、織斑くんを推薦します！」

ほかの女子が言った

「私もそれがいいと想います！」

「お、俺！？」

「では候補者は織斑一夏…………他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

「俺やろつかなあ～
面白そうだし

「せんせ～。俺やりま～す」

「わかつた。他にはいないか？」

「待つてください！納得がいきませんは！」

そこでバンツと机を叩いて立ち上がったのはあの金髪ロールのセシリ亞だった

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥をさらして！」

バンツ

クラスは一きなりの音でびっくりした

なんせその音は銃声で

その銃を持っていたのは俺だったのだから

「いい加減にしろよ、小娘」

俺は精一ぱいドスのきこた低い声で言つ

「じうせその後くだらねえ事を言つのはわかつてんだ。そういう
？セシリア・オルコット」

思いつゝきり睨むとクツと怯えた

おれは銃をクルクル回しながら言つ

「じつちみち俺もクラス代表やつてみよつかなあつて思つてた
んだよな。

じう・じうの決闘で決めるのは。噂の国家代表候補
生がどれぐらいなのかも知りたいしな」

「え、ええ。か、かまいませんはそれで」

「よし、きた。ちなみに一夏、お前もだぞ」

驚いたような声を出す

「え！俺も！？」

「当たり前だ。だつてお前も候補者の中に入つてんもん

「い、いやだあああああああ

頭を抱える一夏

「織斑先生もそれでいいですよね?」

「ああ、かまわん……それより平崎」

「なんですか?」

「銃を没収する」

「うわアウトロー！」

わざわざまで明るくして教室内の雰囲気を和らげようとしたのに

「はこどりや」

そして銃を織斑先生の手の上に置く
まあ、あの銃は術で作ったものだしつか

「ありがとうございます。あとでついでに色々ときいてやる。覚悟しておけ」

ああ怖い。

「はい……じゃあ決闘は一週間後の月曜。放課後の第三アリーナ
で行いましょう。先生予約をしておいてください」

「わかった。織斑、オルコット準備をしておくんだが

「は、はい」

「はい」

ちよつどいい

俺の魔術がどれぐらいIISにきくかも知りたかったし

それと

おれのチートすぎる専用IISも使ってみたかったし

第一話 言わせねーよ（後書き）

すみませんセシリアファンの皆さま
嫌われ者にして

第三話 ジェが魔法だ

「寮の部屋が決まりました」

山田先生は俺と一夏にかぎを差し出す

「俺が1026号室で一夏が1025号室か」

「つて事はお隣さんか」

一夏は拳を手にポンッと打ち付ける

「あ、でも荷物はどうするんだ?」

「それなら問題ない」

現れたのは織斑先生

「すでに手配してある。着替えと携帯電話の充電器。あとノートパソコンも持つてきといた」

ん?俺は?

「お前も一緒だ。着替えと携帯電話の充電器。あとノートパソコンも持つてきといた」

「あ、ありがとうございます」

「それと平崎、今からつもる程の話があるからつこて来い

O H A N A S I ですよ
あ～何訊かれるんだろ？

絶対銃の事訊かれるよ。

えーっと今織斑先生と生徒指導室の中になります。

正方形の机とパイプ椅子が向かい合つて置いてあります

これあれだよな、よく刑事ドラマで見る奴だよな

「立つていすこさつと座れ」

「はい」

そして着席

(おい、勇也。お前本気でバラスつもりか?)

まあ一人ぐらい知つている人がいた方いいしな

(魔術もか?)

ああ。もしかして何か問題があるのか？

(いや、ない)

「さて、訊いへ」

織斑先生が話を切り出す

「銃の事ですか？」

「それもあるが、IISの方が重要だ。無所属のお前がなぜIISを持つている」

「うし、洗ござらう。叶きますか

「実は俺……」

それから俺は織斑千冬に全てを話した。チートや魔術、IISの事も

もちらん俺が一度死んでこっちに来た転生者だといつ事も

先生は何も言わず話を聞いてくれた

「…………といつ事です。ハハ、普通信じませんよね

「ああ、信じられんな

「わあつもつと。俺の度胸を返せ……

「なひじめみよ

は？

「ついて来い。行くぞ

「へ、ベニにですか？

「第二アリーナだ

まじかよ

場所は変わつてこゝは第三アリーナ

そして目の前にはISの訓練機打鉄をまとつた

元世界最強、織斑千冬

「ああ、見せてみる。その魔術やらとを」

そして打鉄の刀を中段にかまえる

まじかよ

おい神様

(なんだ?)

ISに当ても大丈夫な魔法つてあるか?

(基本威力、大きさ、形とかは自分でコントロールできるようになつてゐる)

そうか、ありがとう

「よし、いくぞ！織斑千冬ー！」

俺は火の魔術をえらんだ

魔法陣は手のひらから出てきた

さすがの元世界最強もこれには田を見開いてピックリしている

「くらえーー！ファイアボールーー！」

そして手のひらから炎の球体が形を成してEISに向かつて飛んで行った

ドカアアアアアン

そして砂煙と爆風が巻き起こる

先生大丈夫かな

なんと先生は

「……く

膝をついて剣を地面に突き立てていた

「織斑先生ーー！」

「あ、ああ。大丈夫だ……ぐつー！」

少し出血をしている

確か治癒魔法ほテイルズにもあつたはずだ

「ファーストエイド」

パアッと緑色の光が傷口の所に行き傷口をふさぐ

けつこう手加減したつもりだったんだけどな

「すごいな」

傷口が閉じた方の腕を見て言つ

「魔法とはなんでもありなんだな」

「ま、まあ……」

頭をかきながら言つ

「しかし、さつき疑つたりして申し訳無かつたな」

「いや先生は悪くないですよ。誰だって信じれませんよ、いきなり自分は魔術が使えるんですって言われたら」

「それよりさつきの、威力はすごいな

「え？ 結構弱めでしたよ？」

「本當か？ 私はあの時危ないと感じてシールド最大出力で出したのだと。それで、シールドエネルギー残量残り〇で装甲が一部破壊され、体にも傷がいつてるのだ」

マジですか

「これはオルコットとの決闘を考えた方がよそうだな」

「……あの解つてると想いますがこの事は秘密にしておいてください」

「ああ、もちろんだ」

よかつた

時も場所もかわって今は寮の部屋だ

さつき一夏と一緒に晩飯を食べに行つたのだが

大きなタンゴブが頭にできていた

話を聞くと一夏のルームメイトは篠ノ之だつたらしい。しかも入浴

中だつたらしい。

そして竹刀で叩かれたと

ほんつとラッシュキースケベだなこいつ

はあ、今日は色々と疲れた

もうひ寝よう

ＺＺＺＺＺＺＺＺ

そして一週間後

最初は一夏ＶＳセシリ亞だつた

一夏はこの一週間篠ノ之から教えられた剣道しかしていない

まあこじんだけ粘ってるんだ
上出来だろう

結果、一夏は自分の武器『雪片式型』の特性を把握しておらず、IS-Eが無くなつたのだ。

そして、次は俺だ

「はあ～。俺かあ」

「大丈夫だよ、勇也だつたら勝てるよ……それよりお前専用ISは？」

「こいつは使わない

そこにいたのは織斑先生だつた

「一千冬姉どうこいつー」

バシンツ

「学校では織斑先生と呼べ。あと平崎アレを使つんだったら、ある程度気をつけるよ

アレとは魔術の事だ。

いいのか?と思つてしまつ

人前で使つとバレるし

「好きにしろ。お前が自分で判断しろ。だがお前のISは気をつ

けろ、あれは強あざかる

「ア解です。では最低限武装してまつります」

俺は自分のE-Sの羽だけを部分展開し出撃の準備をした

「うし、行きますか

「勇也…勝つ…」

下で一夏が叫ぶ

「おうー。」

「では、平崎勇也行きます…」

ビーチのロボットを操縦する主人公のよつて出撃する

「なんですか…その武装は…なぜ羽だけですか…？」

「お前を倒すのはこれで十分すぎる

「なめてますの…？」

「いや、なめてるのはお前の方だ

『ウェッポンクリエーター発動
刀と対IIS用マシンガンを鍊成』

そして俺の手のひらに刀と人が持つことは大きすぎる銃が出てくる

「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」

さすがに会場中がこれにはビックリした

みんな同じ驚きの声をあげている

「な、なんですかつきのはー」

「今答える義理はねえな

「さあ、パーティの始まりだ、セシリ亞・オルコット」

『身体強化呪文発動、超感覚呪文発動、

魔法攻撃付加呪文発動、炎』

炎が俺の刀をまとつた

「ああ、どうでも生きてほしかんな?」

第二話 これが魔法だ（後書き）

前回間違ってる所があつたので修正しました
間違ってる所があつたらおしえてください

第四話 Its Magic Time (前編)

あー今回もがんばりました

第四話 It's Magic Time

『では、セシリ亞・オルコット 対 平崎勇也、始め!』

スピーカーから聞こえてきた音の後真っ先に反応したのはセシリ亞
だった

「くらいなせいー」

奴は主兵装の大口径のスナイパーライフル『スターライトmk?』
を俺に向けて撃つた

ふつ遅いな

まあ当たつてみるか

試したい呪文もあるしな

ドカアアアン

「ふん、しょせんその程度ですのね」

「ギーんねん、まだまだだぜ」

俺はシールドをだしていた

それは大きい円で魔法陣が刻んであった

「なんんですか！それは！」

「それだけか？ぜんぜん減つていないぞ俺の シールドエネルギー S.E.」

「…な、なんですか…」

つにつこ一ヤツと笑つてしまつ

「ぐ、ならこれはどうですか！」

セシリ亞は自分の専用機ブルー・ティアーズからピットを飛ばして
俺を攻撃し始めた

俺はそれは高速移動しながら回避して銃を乱射していた

右往左往、上下動いている

正直俺は銃の扱い方を知らないが、下手な鉄砲つりも当たる

あ、当たった

やつと一機目破壊成功

やつぱ銃は扱いこくいわ

俺は銃を魔術で消した

「やつさから貴方は見た」との無い事ばかりしますわねー。」

「褒められると照れるなあ。まあ今度はひつひかりだー。」

千冬 side

「なんだ、あれはー!」

さつきからあいつが魔術を使つとイチイチ一夏はや山田先生が騒ぎ立てるのだ

まあ、それもじょうがないだろつ

だが、あらためて見てみるとす“いな

あんな早い動き普通はできない

しかも展開しているのは羽だけ

それ以外は何もないのだ

普通あんな動きをしたら体にGが加わって動きが鈍くなっているはずだ

『 ああ今度はこいつからだ! 』

『画面』に聞こえる声

さあ何をする平崎……

Side out

勇也 side

「行くぜ!」

『呪文発動、ディープミスト』

卷之二

そしてセシリアの周りには濃い霧ができた

「……！」「こんな物でこまかそなんて無駄ですわよ。すぐにハイバー센

気づいたか

「……映っていない？」

そう今俺はステルス状態に入っている

「まあ粋刺しにしてやる…」

『エネルギー刃を鍊成、100本』

だあああああつとエネルギー刃が霧を囲んだ

おおつと観客がざわめく

なぜエネルギー刃にしたつて？

そりやあ鋼の剣だとそのうちグサリリといつてしまいそうだからな

それは霧の中へと消えて行く

そしてその行方を知る者いない

七

試合終了のサイレンが鳴った

『勝者、平崎勇也』

「二二二一」
「二二二一」

やつた！

そして俺はガツツポーザを決める

でも問題がある

セシリ亞まだ霧はあるし.....

やばい俺もどうなつたかわからん

霧をどけるか

『呪文発動、中止』

おお、消えた

俺はセシリアの状態を見た

そして俺はふと思つた

やりすぎた

セシリアの専用機はボロボロで装甲や装備は切れていたり、はずれ

てぶら下がつてこる物もある。装甲がなくなり切傷もある場所もある。

「うう

フラッと揺れたかと思つと落ちて行つた

「あ、おこー。」

俺はすぐさま駆け寄り彼女を体に引きよせ、抱える

『平崎、そのままオルコットを抱えてピットに戻れ

無線越しに織斑先生の声が聞こえる

「了解です」

そしてクラス代表決定戦は幕を閉じた

「馬鹿者ー。」

バシンツ！

「すみません……」

今俺はペジトの中で織斑先生の前で正座している

決闘の事について話している。周りには一夏や篠ノ介もいる

ああ、床が冷てえ

「やつすきだ。馬鹿者、私は言つたはずだぞやつすきるなど

「すみません、ほんとうにすみません、だからその竹刀を下してください」

そつ俺の田の前には人の形をした鬼が竹刀を持っているのだ

後ろで龍が踊っているのも見える

「それより、勇也わいつもの向だよー。」

一夏が俺に問う

「わいつもの向だよー。」

「もう誤魔化さなくともいいぞ、平崎。お前は公にする事を選んだのだからな」

「うーー。」

反論できない。

正直今のおれにはヒトと戦う時、選択肢は魔術で対抗するしかないのだ

なぜなら、俺のヒトは、ほんとうに強く生きるのだ

「なあ、勇也お前は何を隠してんの?」

はあ、喋るか

どつ道、学園中に見られたのだから

「実は、俺

魔術が使えるんだ

「「「せ~」」」

一夏と篠ノ花、山田先生の声が重なった

「平崎君、嘘はよくないですよ~!」

「やうだよ勇也そんなファンタジーみたいな事できるわけないだ
ら~。」

上から山田先生と一夏

いやこやすでここの世界がファンタジーの世界ですか~……

「平崎の言ひてこる事は嘘ではない。おこりよひじゆこわい実
験体がいるわ~」

そして織斑先生の指を指した方向の先には

セシリ亞が傷だらけで倒れている

「え？」

「やれ

はい？

「ちよっと待ってください。落ち着いて、先生落ち着いてください。

何をさせぬ気ですか？」

まさか、あれに向かってファイアーボールと言わないよな

「何つて、傷を癒してみる」

「ああ、それか
よかつた

「わ、わかりました。では

俺はセシリアの元に駆け寄り

『治癒呪文、発動

「ヒール」

セシリアの体が緑色に輝きだす

そしてみるみる傷口を塞いでいく

「」「！」「」

さすがにビックリ

さすがにむづこの反応慣れたな

「よし、できました」

袖で汗をふく

「うむ、後で一応保健室に連れていいく。これで信じただろう?」

「す、すげえ~」

関心の声をあげる一夏

山田先生なんて、ずっとポカンと口を開けている

「では次は織斑対平崎だ」

「え~、まだやるんですか?」

「そうだよ千冬姉、俺負けちゃうよ~」

「ああ、ガンバレ」

おう、ひでえこの人

「では、移動だ平崎、反対側のピットに行け

「了解です」

えへつと

只今移動を終了して反対側のピットにいます

「平崎君、準備は、いいですか？」

山田先生だ

「はい大丈夫です！平崎勇也、発進する

そして先程戦っていた空へと戻る

「よう一夏」

「ああ

「手は抜かねえぞ」

「ああ、上等だ」

『ウェッポンクリエーター発動
ダガーチェイン鍊成』

えーっと想像しにくいと思うのですが

感じはRRのバジルの武器やソウルイーターのブラックスターの吉
ノ型「鍼黒」を想像してください

つて、俺誰に喋つてんだ？

「行くぞ」

一夏が雪片模型を構える

「おひ、じこや。一瞬で終わらじてやる」

『織斑一夏 対 平崎勇也、始め』

今回は最初に俺が動いた

俺はチェインを一夏に引っ掛けるつもりだったが

奴も速い

しうがない

『加速呪文発動』

バンッとおれは一瞬で一夏の後ろへと周った

「何！？」

「ふん、遅い！」

俺はチエインを一夏の機体、白式に引っ掛け

「でやつ！」

地面に叩け付けた

だがEISはこんなもんじゃ止まらない

「ならば」

『電撃呪文発動』

「ライトニング！」

俺が放つた電機は鎖を通り奴の元へ

「があああああああ！」

そしてばたつと倒れた

『勝者、平崎勇也』

「いえいーどんなもんだいー！」

そしてピース

俺は失神した一夏のを背負いピットへと戻る

「一夏ー」

グッタリとしている一夏によつてきたのは篠ノ之だった

「大丈夫だ、失神しているだけだ」

はあつと溜息をつく

「さすがだな、平崎」

「おほめの言葉凝縮です、織斑先生」

「やめひ、氣色悪い」

「ひどいですね」

「まあ、いい。今日はもう寮に帰れ。明日は大変だぞ」

確かにそうだ何たつて

人前で魔法をつかったのだ

ま、いいか

寮に帰つて寝ますか

そして俺は誰もいない暗いピットの通路を通りた

第四話 Its Magic Time (後書き)

戦闘描写をかなりはぶいて申し訳ござりません

第五話 new comer (前書き)

はあ

最近パソコンが調子が悪い……

「一年一組のクラス代表は織斑一夏君に決定です。あ、一繫がりでいい感じですね！」

山田先生が言つ

「先生、質問です」

一夏が手を上げる

「はい何でしょうか、織斑君」

「俺は昨日の試合に負けたんであうが、なんでクラス代表になつてるんでしょうか？」

「それは

「それは「それは俺とセシリ亞が辞退しただからだ」だから私のセリフを取らないでください！」

またまた、言わせねーよ

「おい、勇也クラス代表やりたくないなかつのかよー。」

「いや、やつぱりお前がやつた方がいいのかなつて思つてな。ほら俺つて強いじゃん。だから一夏に強くなつて欲しいから譲りつと思つてな。」

「えいえい、やつぱれば昨日のあれなんだつたの?」

のほほさんが訊いて来た

はあ、やつぱりか

「もうバレタからやつぱりあれば魔法なの」

。

「「「「魔法?」」」

「そんな冗談を!」

「あるわけないでしょ、そんなの」

「やつだよ。あつたが」の世の中どんなけ便利か

「お前ら、平崎の言つてこむ事は本当の事だ。私は身をもつて知らされたぞ」

「「「「え?」」」

「ほ、本当にゆうひ?」

「うん、やうだよ。あの霧も剣も銃も全部魔法だよ」

「へえ~

「今度見せてあげるよ」

「では、話を戻すぞ。織斑、拒否権は無いぞ」

追い打ちをかける織斑先生

「ううー。」

「何たって、貴様は負けたのだからな。クラス代表は織斑だ。わかつたか?」

はーいと言つ(一夏以外)

いまは四月の下旬

「ではこれよりE.Sの基本的な実践をしてもらひつ。織斑、オルコツト、平崎試しに飛んで見せろ」

キュイイインツ

と音共に俺とオルコットはHISを展開する

当たり前だが俺は羽だけだ

「やつとできた

やつとの事でHISを展開する一夏

「よし、飛べー。」

俺とオルコットは軽々と空へと舞い上がる

遅れて一夏がやつてくれる

「何をやつている、平崎のHISはわからないが、白式はスペック
上ではブルー・ティアーズよりかは上だぞ」

「うーん。やつ言われてもな」

急上昇は前方に角錐を展開するイメージらしい

「やつこや、平崎は何をイメージしてるんだ?」

「俺は思ったと同時に動けるからな」

「……す、すいこなあー」

『平崎は特別だ。普通はそんな事をするのは難しげだ』

無線越しで織斑先生が解説をする

「なあコツとか教えてくれよ」

「ダメだ。それならセシリアに教えてもらいたい

「え、ええ。よしければまた放課後に指導してあげますわ。そのときはふたりきりで」

「一夏つーこつまでそんなことひるー早くおつてこー。」

下にいる篠ノ之が山田先生の無線をパクって使っている

「織斑、オルコツト、平崎急降下と完全停止をやつてみる。田標は地表から一〇センチだ」

「「「了解」」

「ん、じゃ俺先に行くわ」

俺は急降下をするやつを見せて

「」を空中で解いた

「えー」「

「なつー」「

「はあつー?」「

皆似たような驚きの声を上げるが

織斑先生だけは無言だった

俺が何でもできるとでも思つてゐるんだろうか?

このまま落ちるのも良いが

危ないからやめとこ

俺は地面すれすれのところで魔術を発動をせる

『風呪文発動』

俺は足元に自分がちょっと浮くぐらいの風をつくる

ブワツー!

俺は華麗に着地する

「　　「　　「　　「　　「　　「　　「　　「　　「　　「

と周りは声を上げる

「「」これが魔法だ」

「まつたく……いいか普通はあんな事はできないぞ、いいな真似をするなよ」

すぐ後にセシリ亞が来る

「ほんっと、貴方は変わっている事ばかりなさいますわね。先日のあれ以外もできるですか?」

「ん?秘密」

その直後一夏が隕石のように落下げてきた

俺は頭をおさえ

「バカだ……」

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った

グラウンドにクレーターみたいな穴ができた

? ? ? ? side

「ふうん。ここがＩＳ学園か……」

夜、ＩＳ学園前に、小柄な体に不釣合いなボストンバッグを持った少女が立っていた

「君が中国の代表候補生、鳳・鈴音？」

私の後ろにはＩＳ学園の制服を着た男子がいた

「へえー、良く知ってるじゃない。そりよ、が鳳・鈴音よ。あなたは？」

「俺は平崎勇也だ。勇也って呼んでくれ

「わかつたは、じゃあ私のことも鈴^レつて呼んで。それよりあんた此処の生徒？男子は一人だけだと思ったけど

「俺も一応此処の生徒だよ。それより受付に行きたいんでしょ？案内するよ」

「あ、うん。じゃあよろしくね

あれ？

私受付に行くと言つたつけ?

「ええと、それじゃあ手続きはこれで終了です。ヒカル園によつて
「あ」

「これでさつと終わつた。

「やつぱり勇也、織斑一夏つて子知つてる?」

「ああ、知つてゐよ。俺と同じ一組だからな」

「ふーん。あつや」

「素直に一夏に会いたいって言つたら?」

「え? 一何こつぱりつてんのよ?」

「好きなんだら?」

私は別に……まあ、好きなんだけどね

「へえ~そりなんだ」

「ひよ、何で心の中がわかるのよ?」

「まあね。俺は特別だからな」

はあ、疲れる

もつこいや寮に帰つ

「んじゃ、私もう戻るわ

「うんわかった。あーあと、一夏を狙っている人多いからね。ガ

ンバレよ

「へ、うむきこわねー

ああーもつ行ーいー

「もうすぐクラス対抗戦だねー。」

「ああ、そうだな

俺は上の空で答える

「そういうえば一組のクラス代表が変わったのよね」

ほつ

もしかして……あいつか?

俺の頭に小柄なツインテールの少女が横切る

「ふんっ! わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら。」

セシリ亞御冗談を

「「ないない」

俺と一夏が手を横に振る

「お、今ハモツたな」

「ああ、そうだな」

「どんなやつだろ、強いのかな。」

「今のところ、専用機を持つてるのって、一組と四組だけだから余裕だよ。」

「「その情報古(レトロ)よ(レトロ)」

またまたハモる

だが今回は俺と鈴だった

「昨日ぶりだな、鈴」

「そうね、そして私、中国の代表候補生鳳・鈴音がラス代表になつたの。そう簡単には優勝できないから！」

「鈴、お前なのか？」

「口ッと笑つて言つ

「そうよ久しづりね、一夏」

「何カッコつけてんだ、似合わないぞ」

「な、何よ！」

「鈴、後ろを//口」

俺は鈴に忠告をやつた

「え？」

ガンッ！

「痛つた～、な、何をする」

「邪魔だ、もうSHRのじかんだぞ。」

そこには鬼が立っていた

「ハ、千冬ちゃん」

「ハハ」では、織斑先生だ」

「は、はい。一夏逃げないでねーー。」

どこのこ、逃げンだよ

つと一夏は呟いていた

はあ

本当に原作どうりだな

新しい武器でも考えておくか

第五話 new corner (後書き)

感想とかぜひぜひくださー

い要望も聞きます

可能であればだしまーのー

入れるかどうか迷ったあげく

入れることにしました

これは第四話の夜とこうつ設定です

「 「 「 「 セー の……」 「 「

「 「 「 「 織斑くん、 クラス代表就任おめでとう。」 「 「

ふつ

パーティか

たまにはいつこうレクリエーションも必要だろつ

「 一夏、 よりいじ。皆がお前の為に用意したんだぞ」

「 はあ。俺はクラス代表に就任した事は全然嬉しくないんだがな

……」

まあ、いいやもう始めよう

俺は椅子の上に立ち

「皆さん、よくぞ一夏のクラス代表就任パーティにお越しいただきました」

俺は自分のジュースが入っているカップを持ち上げ

「では、御唱和してください。

乾杯！！！」

「「「「「かんぱ～い！～！」」」」」

そして皿にお菓子を食べだす

「ねえ、ねえ織斑くん一緒に食べよ!」

「私も私も!」

「ちよつと私もですわ!」

皆が寄つてたかって一夏を引っ張りだこにする

やじてこつけられない

遠くのほうで篠ノ介が睨んでこむことを

そして俺は……

「ねえねえ、昨日のあれなんなの?」

「教えてよ……」

「特技は?」

と、にたり寄つたりなんだかな

「あれは魔術だよ

俺はケロッとして答える

「へえへ、そなんだ」

「噂できこてたけど本当だたのね

「ああ、本当だぞ」

「「「「……」「」「」

そこに立っていたのは以外にも以外

織斑先生だった

「お、織斑先生……」

「お前ら、あまり騒ぎ過ぎるなよ。あと、ちゃんと消灯時間には自室に戻るよ!」、わかつたな?」

ちゅつと周りがビックリしている

実は言つと俺もだ

「えりした、さつやまでのトンチンチャン騒ぎは何処へ行つた？」

「せ、先生飲みます？」

俺は缶ビールを持ち上げる

「ま、たまには良いだろ？」

そして俺の隣にドカツと豪快に座る

プシュッと良い音を立ててビールを開け、そして飲む

「それより平崎、なぜお前がビールを持つている

「ふつ、先生甘いっすね。俺は魔法使いですよ？」

「まあ……普通いこま捕まえるべきなんだろ？」

そしてビールを見る

「はい、そうですよ。口止料金ですよ。理解が速い人は助かりま

す

「……今回だけは田をつぶつてやうへ、だが飲み過ぎるなよ

「先生も同じでしょ」

そしてフツと笑う

「そうだな」

「そういえば、魔術の件だが……」「……」

それを言つた瞬間周りのどよめきがやむ

「あまり使い過ぎるな、危険だからな。あと、お前り何回言つかわからんが平崎の言つている事は本当だ。織斑、篠ノ瀬お前らは田の前で見ただろ？ こいつがオルコットの傷を癒すといふを」

「え？」

セシリアが驚く

「私の傷が何も無いのは彼のおかげですか？」

「ああ、そうだ。普通あんなに深い傷が体中にあつたら傷跡が残るはずだろ？ だがこいつはその魔術とやらを使ってなおしたのだ」

「そ、そうだったのですか……」「

うつむくセシリア

なんだかのしんみりした空気は

「あ、あの……あ、ありがとうございました」

やつまつて頭をさげる

なんだかこいつやって感謝されたのは久しぶりかもしれない

「いや、いいよ。俺が作った傷だし」

「それより平崎、お前あの模擬戦手をぬいてただろ」

「うつ！」

「バレましたか」

「おれは不敵に笑う

「まあ俺が知っている限り最強の魔法はありますが使った事がないません」

「試しに使ってもよかつたのですが、教えてもらつた人によるとその威力は……」

「ゴクッ

「周りから唾をのむおとが聞こえる

「アメリカを軽く吹き飛ばせるらしいですよ」

「「「「」」」

唚然

ちなみに教えてくれた人は神様だ

「でも威力、大きさ、場合によつては形を変更できるんです。だから、この前織斑先生に撃つた下級呪文のファイアーボールだつて威力を高くすればISHだつてチリカスだけを残す事だつて可能なはずです」

「へ、へえ～」

流す女子

「それより、これでクラス対抗戦も盛り上がりそうだな」

俺は話を変える

「え～私はゆうゆうの魔法もつと見たかつたなあ」

「大丈夫だよ、のほほんさん。これからはもつと見れる機会がこの先あるから。たぶんすぐにも見れるよ」

ちょっと織斑先生が反応した

「え、そつかなあ」

「うん、大丈夫だよ」

そこへ

バンッ!!

「はいはい。新聞部です。話題の男子、クラス代表と自称魔術師に特別インタビューにきました!」

オーと盛りあがる、一同

「私は^{まゆずみかおる}薰^{くわ}子^こね。よろしくね。新聞部福部長やつてます。あ、これ名刺ね」

めんどくせうな字だな

「ではまず織斑君ークラス代表になつた感想をどひでー!」

そしてボイスレコードを向ける

「えーと……」

「まあ。なんといつうか、がんばります」

「えー。もつと何か」メンツちょっとだいよ~

「は、はははは」

かわいた笑いをする一夏

「んじゃあ、平崎君。ズバリ彼方は魔術師だといつ噂が流れてますか、それは本当なんでしょうか?」

「あ、はい。それは真実です」

「またまた、いい冗談言ひやつて」

「では披露をしあげましょ~」

イエイ!

やつた~!!

と声を上げる女子たち

「ではちよつと離れて」

「これか」

『炎呪文発動、フレイム』

そして俺の手のひらの上に炎がともる

「かまこませんよ」

「アリ！！」

「あとこれ以外にいつぱいあります。他にもスプラッタ系統だつたら心臓をつぶすとか、血を逆流させるとか、体をバラバラとかできます」

.....

「……………」

「俺お前が死んで

殺すや？」

俺は福部長さんをにらんだ

結果

全員が無言

織斑先生がすごい田でみていく

「なんて半分冗談ですよ」

おれはニコニと笑う

「半分って……」

「じゃ、じゃあ次はセシリアちゃんもコメントちょうだい

「では、まず、どうして私がクラス代表を辞退したかというと、

それは

「

「もういい。長くなりそうだし。適当になつ造しておくれよ

「一夏に惚れたからってのは?」

俺が提案する

「いいねそれ！それで行け！」

「なにを！」

顔を赤くするセシリア

「はいはい。もういいや。次は写真撮影ね。わあわあ、三人とも並んで！」

「あ、セシリアちゃんは織斑くんと握手して、そして平崎くんは手から魔術を出しどうして！」

よし

俺はさつきの呪文をもう一回発動する

「それじゃあ、こくよー！」

カメラを構える先輩

「35×51÷4は？」

一夏が答えるよつとある

「えーと……2？」

「違うバカ。74・375だ」

「正解！」

パシヤ

「なんで全員入ってるんだ？」

れつたの一瞬で全員の集合写真を撮つたのだ

「あ、あのね……」

「セシリアだけ抜け駆けは無いでしょ」

「良い思い出になるじゃな」

「う、ぐ……」

反論できないセシリア

「おー、お前らもう消灯の時間だぞ」

「 「 「 「 ハーイ」 「 」 」

そして俺らの長い夜のパーティが終わった

そのころ

「平崎勇也、あなたいったい何者なの？」

昔の経験がない彼の資料を見て呟く

「ふふ……オモシロい人、はっけえ～ん」

そして彼女はパソコンをけした

フリフリのドレスを振り暗闇に消える

すいません

本編と混同してしまったらしいません

感想いつぱいください！！

応援メッセージをください！

元気付けられんるんで

第六話 セカンド・幼馴染（前書き）

いえい！

結構何か長がくやつてきた感じがします

でせじわー。

第六話 セカンド・幼馴染

「それにしても久しぶりだな。ちよつゞ丸一年ぶりになるのか。元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病気しなさいよ」

「ビリビリの希望だよ、そりや……」

只今昼休み

場所はカフェテリア

「お、向こうのテーブルが空いてるな。一緒に食おうぜ。勇也」

「ん？ああ。わかつた」

そして俺らはテーブルについた

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？おばさん元気か？いつ代表候補生になつたんだ？」

「質問ばつかしてやんなよ一夏。鈴だつて訊きたい事あるはずや

？」

「そりや。つてか何でわかつたの？昨日だつてそりや。名前はわ

かるけど、何で心の中がわかるのよ

「俺は何でもわかるぞ。何たって俺は魔法使いだからな」

本当は原作の知識があるからです

「へえ～、あんたが噂の。うちの国でもちょっと有名だったもん。I.Uを使わず代表候補生を倒した男ってね」

「そうなのか」

「ええ、そうよ。うちの国の人も本気でアンタの事が回ってるわよ」

(ああ、そうだぞ)

おー久しづびり神様

(スマナイ、しばらく席をはずしていく)

うん、いいよ
何してたの？

(世界各国のお前に対する考え方を述べていだ)

んで、どうだったの？

(最悪だ。色々な奴等がお前を狙いに来ている)

なつー？

(ドライシヤフランス、他の企業や国も死に物狂いで追っかけてる。多分全国の国家代表や代表候補生にも通達が行っているはずだ。調べるとな)

やつかいな事になつたなあ

(ああ、気を付ける。なるべく、そつ等は信用しない方が良いござ。
用心しておけ)

……わかつた

「ん? どうしたの?」

鈴が首をかしげる

「いや。何でもない」

何かこいつが死なそつな人を疑うのは心が痛い

そして

「一夏さんからどうしていつ関係か説明してほしきのだが

「やうですわーー一夏さん、まわかの方と付き合つていたいしゃる
のーーー」

篠ノ之とセシリアがやつて来る

一夏と鈴が戸惑つてこる

「代わりに説明してやろう。鈴は一夏のセカンド幼馴染なのだ」

「セカンド幼馴染?」

篠ノ之が訊く

「ああ。篠ノ之が小学校四年生で引っ越しただろ?その後入れ替わりで鈴が入つて来て、中一の終わりでとある事情で中国へと戻つたんだ」

「よ、よくそこまで知ってるわね」

「ああ。色々なことを知つているぞ。例えばお前ら三人の好きな人とか」

「「「！」」」

そしてビックリするセシリ亞、篠ノ之、鈴

「お、恐るべし」

「ふふ、次から俺に対する態度とか考えた方がいいぞ?」

三人の目が動搖している

「それより鈴、一組のクラス代表になつたんだつけな」

ナイス

よく話を変えた一夏

「ち、ちうよ。ちうこえばアンタ、クラス代表なんだつてね」

「ああ。ほとんど強制だつた」

「ふーん……」

そして「ゴクゴクと器を持ち上げてラーメンのスープをのむ

俺はテレパシーを使う

『HISの訓練を見てあげるつて言つていい?』

ピキーンー

と何かに閃いた顔をする

え?

何でテレパシーが使えるかつて?.

その魔術を作ったのだよ

「あ、あのさあ訓練私が見てあげなくも無いけど?」

「そりや、助か

「

バンッ!!

「一夏に教えるのは私の役目だ」

「あなたは二組でしょーー!敵のボディーは受けませんわー!」

顔が怖いぞ

はあもういいや行ー!つ

そして俺は席を立つ

俺は自分の部屋に戻りパソコンをつかる

そして開いている画面は

俺のEISの画面だ

俺のEISは最強なのだ

いきなり血飞と変なのが

代表候補生の専用EISと比べても

相手を瞬殺でやるぐらいの強さをほしる

ちなみに俺のEISは武装が何一つ無いのだ

最初見たときは意味がわからなかったが

メモ帳にこんなことが書かれていた

「 やあ。 げんきか? このEISは気に入ってくれたかな?
 まずなぜ武装が無いかを説明する。 武装などあると邪魔になるから
 だ。 」

お前はそれを創り出す能力を持っているんだ。 武器を展開するよ

速く出せんんだ。

では、がんばれよ

神様より「

あと名前も無い

まあいいか

一応納得いくし

バシインッ！

は？何の音だ？

多分、隣だ

要するに一夏の部屋だ

行って見るか

「何してんだお前ら」

俺の前では篠ノ之の竹刀を部分展開したISで受け止めている鈴がいた

「おい、なるべく静かにしろよ。お前ら織斑先生来たらどうなるのか知つてんのか?」

急遽ISを解除する鈴

竹刀をケースの中に入れる篠ノ之

「よしそれでいい。なるべく静かにしろよ」

今日はなぜかしんどい

部屋に戻ろう

数分後

パアンツ！！

ガチャ

バンツ！！

もう我慢ならん

俺は自室のドアを開けて右を見たら

壁に頭をつけている鈴がいた

斜め45度／

つて違う

「あ、おい。どうしたんだ

「

れてた

「は？」

「アイツ、私との約束忘れてた……」

そして滝のようになみなみと涙を流す鈴

「なるほど。一夏はお前との婚約を忘れてたわけか」

「婚約つて」

顔を真っ赤にして言う鈴

カワイイなあ～

つてかあいつフラグ立てすぎだろ！－！－！

「はあ。もう一件事わかったよ。とりあえずかんばれ！」

「つて何よその言い方！！もつとましな慰め方無いの！？」

「無いよ。とりあえず、みすみすとフラグ立てられたお前にも非はあるが。とりあえず、紅茶あげるから持つてかえつてのんだけ」

「……はあ、わかつたわよ。」

そして俺はポットの紅茶を水筒に入れて鈴にわたす

「ほらよ

「ん。 ありがと。 なんか少し楽になつたわ」

え！？ わつきのでー？！？

「ありがと」

「ああ。 じゃあな

そして俺は鈴をとつあえず部屋からおいです

織斑先生にでも見つかったら大変だからな

は
あ

まさか一夏があの約束を忘れているなんて

『もし私の料理が上達したら、毎日あたしの酢豚食べてくれる?』

そり、こんな約束をしたのだ

私を重い足を上げて部屋にたどり着く

なんでアイツはあんなに鈍感なのかなあ……

もつとましな言い方しつけば良かつたかもね

なんて恋は苦いのでしょう

なんて自分視点のナレーターの様な事を言つ

私は勇也にもらつた紅茶を飲む

「甘苦こなれる……」

その紅茶は

恋とまったく同じ味がした

第六話 セカンド・幼馴染（後書き）

「 鳴也が鈴にフラグをたてました」

みたいになりました

実はこれ

まだヒロインがきまつていなーんです

要望受け付けます

只のハーレムでもいいんですけどね

感想いつぱいくださー

只今、五月

そして今から

クラス対抗戦が始まる

一回戦は運が良いのか悪いのか

一組 対 二組だった

さすが一夏が注目の人だけあるわ

アリーナは満員御礼

ちなみに俺は先生達がいるピットにいる

「もうすぐですね、織斑先生」

「ああ、そうだな」

「その落ち着いた様子だと何かアイツに入れ知恵したんですか？」

「まあな」

「あ、一応ちやんと衆の面倒は見るんですね、織斑先生」

口をはさんだ、山田先生

ガシッ！

「ふぐ……お、織斑しえんしえい。や、やへてください」

ヘッドロックをされて苦しそうにもだえる山田先生

「私は身内ネタで馬鹿にされるのがキライでな」

「ちよ、織斑先生！もついい加減に放してあげたらどうですか！？顔が真っ赤になつてますよ……！」

そして解除する先生

「ほ、ほり。もうすぐ試合が始まつますよー。」

「やうだな」

俺と先生たち、そして専用機組みはスクリーンに釘づけられる

俺は原作を知っている

故にこれから何が起こるのかを知っている

俺はそっちの方が楽しみだ

開始から数分がたつた

一夏は鈴の I.S. 甲龍の『非固定浮遊部位』アンロック・ユニット
『に悩まされながらも粘っている

それよりさつきから一夏が何かを気にしている

「何か一夏が狙ってるっぽいんですけど何をする気なんでしょう
か?」

「イグレッシュン・ブースト
瞬間加速だ」

ほう、あれですか

世界中のH.Iの知識を持っている俺にはわかる

イケニッシュ・ショーン・ペースト
瞬間加速とはその名のとおり、一瞬で加速し奇襲をかける技だ

近接格闘装備しかない一夏にひつてつけの技だ

教えた人いわく、出し所さへ間違わなければ代表候補生ともわたり
あえるらしいです

『ぐあつーー！』

田に見え無いらしい攻撃を受けた

「なんだ、あれは……」

篠ノ之が咳く

「あ、あれは衝撃砲だ。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余
剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち出す。ブルーティアーズ
と同じ第三世代型兵器だ」

さすがにもう自分の出番を奪われるのに馴れたオルコット

「お、ぐるか？」

一夏が雪片式型を構えなおす

『うおおおおおおー！』

ズドオオオオオオオオン！――――――！

その刹那何かがアリーナの遮断シールドを貫いた

「「なつ！」」

セシリ亞と篠ノ之が声をそろえて驚く

「来たか……」

俺は呟く

「！」

俺はきついでいなかつた

織斑千冬が反応している事を

「山田先生、すぐに二人に脱出命令を――！」

「わ、わかりました！」

「織斑くん！鳳さん！今すぐアリーナから脱出してください！すぐ先生たちがエスで制圧に行きます……！」

「織斑くん！？だ、ダメですよ！生徒さんにもしものことがあつたら」「

「もしもし！？織斑くんきいてます！？鳳さんも…きいてます！？」

「どうやら本人達がアリーナに入つて来たエスを倒すと言はつているらしい

「本人達がやると言つているのだから、やらせてみるのもいいだろ？」「

「お、お、織斑先生！何をのんきなことを言つてるんですか！？」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

先生、それ

「……あの、先生それ塩ですけど……」

あ～あ、言つちゃつた

「なぜ塩があるんだ？」

「ち、さあ? でもあの大きく塩つて書いてありますけど……」

そこまでにしといたら？山田先生

「あひーやひぱり弟さんの事が心配なんですね！？だからそんなミスを」「

「山田先生、『ヒーヒー』をどうぞ」

「へ？あ、あのそれ塩が入ってるんじや」

「ダニエル」

そして嫌な沈黙

「い、いただれもす……」

「熱いので一気に飲むといい」

あ、
悪魔だ

まあ、もし原作どうりだつたら大丈夫なはずだ

一夏が最後の賭けにでた

そして敵を一刀両断

「おおー。」

やつおつた

これで一件落着

と思こあや

ガシャアアアアアアン

!!

ん、何?

一体田だとー?ー?ー?ー?

バカなー!

「山田先生、シールドのクラックはまだかー。」

「まだかかりますー!」

さすがに一体田はある一人にはキツイと思つ

シールド・エネルギーも底をぬけてこるはずだ

「先生、俺、いつてきまゆ」

「 「 「 「 「 「

「無理だーお前さつきまでの話を聞いていなかつたのかー助けに行くおろかこの部屋からすら出られないんだぞ！」

「そ、そりですよー私も先生としていかせる事はできません...」

「道が無いのならば作ればいい。それに俺は死なないぞ？」

「言つてゐる意味がわかりませんわーー！」

「行って來い」

織斑先生が俺につげる

「 「 「 「 「

「お前なら大丈夫な氣がするからな」

「ありがとうございます」

俺はピットルームの扉を吹き飛ばし親愛なる友を救いに行くために走った

ウソでしょ！－！

二体目だつて！？！？

「クソ！」

「下るぞ、鈴！」

夏はあのIISと間合いを開ける

『織斑くん！聞こえますか！？応答してください！…』

「山田先生！」

『よかつた！さりきそつちに平崎くんが向かいましたー』

「勇也が！？」

ですから、田舎脱してください!』

先生それは難しそうですよ、粘れるだけやつてみます！」

ダメです！！！織斑く

れぬ、此の二事はいかがいが?

額を一粒の冷たい汗が落ちる

「行くぞ、鈴！」

「わかつてゐわよ。」

私は青竜刀を構へ、突撃

右、左、右、左へと刀を振るうがまったくあたらない

「ハーバードの法廷」

「下れ！鈴！・！・！」

田の前に「ロツクされていません」の文字

「ウソ……」「

レーザー発射口が光った

その時私を慰めてくれた人が目の前にいた

勇也 side

俺は鈴の前に立ちシールドを展開

攻撃を吸收

「ふう～間に合つたあ」

「「ゆ、勇也！～！」」

「よう！大丈夫…………そうじやないな。ここは俺に任せろ～～～お
前らはピットに戻れ！」

「ん、何を言つてるんだ！一緒に戦つぞ！」

「無理よ！一夏。私たちがいると邪魔になるもの」

「やつめついた。鈴、一夏を連れてペリットに戻れ

「わかったわ」

あーーと

目の前にいる無人機をスクランプにしますか

「こいよ、俺は最強だぜ？」

俺はISを展開する

いつものように羽根だけではなく、全部だ

たちまち俺の体は輝きISの装甲に覆われて行く

黒と赤の全身装甲タイプだ

ひらたく言えば白黒の黒と赤のラインが入ったISだが

性能はその何十倍だ

チートすぎるだろ、これ

「や、いくか

俺はやつにむかって急加速

だが、速すぎて周りからは消えてるよつて見えるのだ

俺は一瞬で無人機の背中をとり

魔術を発動させる

「くらえー」

『雷呪文発動』

「サンダーブレード…………！」

手の内から剣の形をした雷をだす

それは無人機に当然あたり、木つ端みじんになつた

この動作約5秒

なんで無人機が一機になたんだろう

(それはお前がこつとに世界にきたからだ)

「…………」

「決めたぞ」

（何を打だ？）

「ISの名前だ」

（聞かせてもらおう）

「終止符だ」

「理由は」の原作を終わらしたからだ

第七話　ここでのお別れ……（後書き）

まだまだヒロインアンケート募集中です！――！

第八話 苦労、そして楽しさ（前書き）

学校から投稿 WWWWW

第八話 苦労、そして楽しさ

あれから数時間

今、一夏がいる病室なのだが……

「どうしてあなたが？……一夏さんは一組の人間、二組の人にお見舞いされる筋合いはなくってよ」

「何言つてんの？ あたしは幼馴染だからいいに決まってるでしょ。あんたこそただの他人じやん」

「わ、わたくしはクラスメイトだからいいんです！ それに、今は一夏さんの特別コーチでしてよ」

「うるさいぞお前ら。 静かにしろ」

割り込むぜ

「関係ある、ない関係ないだろ！」

「そ、そうですわね」

「そ、そうね」

うし丸め込めた

「それより、一夏体大丈夫なのか？」

「ああ軽い全身打撲らしい」

大丈夫か？本当に

「まつたく、無理をして。やつやつアヒテ戻ればいいものを、残つて戦うなんて」

「あははは」

「よし、一夏。お前が復帰したらお前の訓練をみてやる！」

「マジでー.?」

——ダメですね！（うー）」「

セシリアと鈴が叫ぶ

「訓練をみるのは私の役目よ。」

またハモツた

「よし、じゃあ勝負だ」

俺は指を一人に向ける

「勝つたらコイツの訓練を見る」

「 うーん、（どうせ）……。」

俺に勝てるとも思つてゐるのか？

一夏には強くなつてもさうわなくては困る

この先、色々な事が起るが

それを余裕で超えてほしこころだ

「はあ～

溜息をつく一夏

ピココココココ

ピコココココ

俺の携帯だ

ポチツ

「もしもし？」

『私だ』

「あ、織斑先生」

『話がある。職員室まで来てくれ』

「わかりました」

ピッ

「んじゃ、俺用事ができたから行くわ

「ああ、わかつた」

「お大事に。それと勝負は後日な

俺は職員室へと向かう

俺はついていく

エレベーターだ

俺らは学園の地下五十メートルまで下がる

ここはレベル4権限権限を持つ関係者しか入れない場所だ

「ついたぞ」

そこは研究所みたいだった

そして

例のISが横たわっていた

「解析がすんだそうだ」

「やはり無人機でしたか？」

「ああ、そうだった。国家も無所属、登録もされていない」

「やはりですか……両方ですか？」

「ああ」

「アは世界に467個しかない

そして世界で一人しか作れない

篠ノ之束博士

苗字だわかると思うがあの篠の姉だ

という事はこれを作ったのは彼女だということだ

何のために?と今織村先生は頭の中で葛藤しているだらう

「平崎、お前何か知っているのか?」

「なぜ訊くんですか?」

「いや、お前は転生者で魔法使いだからな」

「せ、先生俺が魔法使いだからって何でもできると思つてこるで
しょ」

「ふつ。まあな

「でも、思い当る人ならいますよ

「！」

「篠ノ之博士ですよ。あの一人不思議の国のアリスやつている人
「アイツか…………まで、なんでアイツが変な事をやつている事
まで知つている?」

「俺は色んなことを知つていますよ、白騎士さん?」

「……ビリでそれを知つた?」

「ビリでと聞かれましても。俺は魔法使いですから」

「なら、なぜあの時黒いTシャツが来るのを知つている素振りをした
んだ?」

……聞かれてたか……

ならば

「あ！あれば未来予知ですよ」

「…………… そうなのか？」

案外この人騙されやすいのかな

「なら、今から私が何をするのか知つてているのか？… 言つてみる」

え？ まじで

テイルズにもそんな魔術なかつたし

作つてもすらいないし

「な、殴るでしょ うか？」

「正解だ」

パアアアアンッ！

何で！？！？！？

「次奴らのような物と戦つときはせめてコアの原型をとじめさせ
る。解析に手間がかかる」

「そ、そんな状態がヒドかったんすか?」

「グシャグシャだ」

……すません

「もういい、一田寮に帰れ」

「はい、失礼します」

俺は来た道を戻る

千冬 side

まさか平崎がアソコまで知つてているとは

それより問題は奴のHSの強さだ

あれは異常だ

だれが作ったのだ？

そしてどうやってあれほどの物を？

やはりあのバカに訊くべきか

千冬はポケットから携帯を取り出しある番号にかける

プルルル、カチャツ

速いな

「もすもす、終日？」

ブツツ

よしもう一回だ

次は常人であることを祈る

プルル、ガチャ

「ヤツホ～、皆のアイドル束さんだよ～！」

ヤツパリ切るう

「待つて、まつて、さ、切らなこでえーちーちーせんー。」

「はあ、いい加減その呼び方をやめろ」

「うん、わかつたよちーちやん」

まつたく

「…………もういい。それで今回の無人機の件はやはりお前か?」

「うん、そだよあー」

やつぱりか

「何の為だ」

「うーん、そりゃヤツパリいっくんの為もあるよ。それより……」

「…」

「それより?」

「あの例の自称魔法使いくんに興味をそそられたんだよねえ」

「平崎か」

「うんーーその子ーー」

「変な事するなよ」

「うん、大丈夫だよおーっと。会いに行くだけだから」

「……それが問題だろ」

現在東は世界各国、企業から最重要人物として追っかけまわされている身だ

「うんじゃあ、そのうちちーちゃんにも会いに行こうかな」

「好きにしろ。じゃあな」

「うん、バイバイ」

勇也 side

二二二はま田室

「やつぱり俺か……」

俺は先程の会話を盗聴していた

めんどくさい人に目つけられたなあ

はあ今日もせんざんだな

こんな日常を送っている主人公の精神が知りたいわ

コンコンッ

俺は起き上がった

まさか

もう来たのか…………？

俺はショットガンを魔術で練成し構える

「ちよつと待ってください」

油断しているふりをする

開けるぞ

2

3！

バンッ！ヒドアを開け

銃を向ける

「動くな！！」

俺はポンプアクションを行いリロードし弾が入ってる」とを見せ付ける

「ひいいいいいつ……」

そこ元いたのは

山田先生だった

「へ？せ、先生？」

「う、撃たないでください……お願いです……」

大声を出す山田先生

本当にこの人先生か？

ビビリすぎだろ

完全に小動物と化した山田先生を見る

「わかりましたから。叫ぶのやめてください」

俺は銃を消す

「ほ、本当ですか？」

「前みてください」

俺は手を上にあげヒラヒラと振る

「ほ、よかったです。てっきり脅されて部屋に連れ込まれるかと思いました」

「俺がそんなことする人みえますか？」

「あ、それより重要な事があります」

「？」

「あなたのEVAのデータをEVA学園に提供してください」

「なぜですか？」

「それは、全ての生徒の機体データを把握するためです」

なるほど

それで研究すると

「わかりました。明日渡しますので」

「あ、はい。わかりました」

たぶん来月の学年別トーナメントが関係してるんだろうな

俺だけ最強じゃズルいからな

たぶんロミッターかけられるだろうな

でも、まだ使っていない魔術もぐさるけどあるしな

「ひ、来月の学年別個人トーナメントだが……」

外から篠ノ之の声が聞こえる

何だ？

と思いつてアを少し開け見ると

「わ、私が優勝したら

」

「つ、付き合つてもひりつーーー。」

おおへ

よべ言つたー

でも一夏の事だから勘違いしてそつだけビ

これから画印くなつそつだ

第八話 苦労、そして楽しさ（後書き）

ヒロインアンケートですが

今用が締め切りです

もっと豊富をください…！…！

第九話 平崎のお仕事（前書き）

なんか主人公が・・・・・

第九話 平崎のお仕事

六月頭、日曜日

俺は神様と一緒にあの白い空間にいる

「俺死んだの？」

「いやいや、まだだから」

手の平を横の振る

「じゃあ、何で俺ここにいるの？」

「私がよんだからじゃ」

「何で？」

「お前にある仕事をして欲しい

「何をするんすか？」

「殺しの仕事だ

「却下です」

「え？、何でよ

「あたり前です！誰がそんな事するか！」

「いや、お前自分でまた種を刈れよ」

「え？」

「殺してもらつのはお前の事をとっ捕まえようとしている奴らだ」

「で、でも何で殺す必要があるんだよ」

そんなのおかしい

そんな奴等ほつとけば良い事なのに

「お前、周囲にも被害がおよぶかもしないんだぞ」

「！」

それは

ダメだ

一 夏や鈴や他のクラスメイトの顔を思い浮かべる

「覚悟はできたか?」

「…………誰を…………やるんだ」

「覚悟はあるらしいな。殺す人はコイツだ」

そしてホログラムの映像が出てくる

おお、最先端技術

「名前はハイドル・ファインだ。23歳、イギリスの『テュノア社の研究者だ。キサマのHJと魔術に目をつけてる』

「で、どうすればいいの?」

「私はコイツをある閉鎖空間に閉じ込めた。」のブリーフィングの後お前をそこに転送する。その後は自由だ。殺し方は気にしない

い

「…………その後その人はどうするんだ」

「どうする?」

「え?」

「お前が決める。選択肢は三つ。一つ、その人物に関する記憶を

消す。一つ、死体を元の世界のどこかに放置する。一つ、手紙で家族だけに教える。」

「せめて…………せめて家族だけにでも伝えてやれ」

「いいのか？」

「え？」

「場合によつてはお前に変な疑惑がかけられるぞ」

「いいよそれで」

「そりが、では行くぞ」

「ああ」

俺は青い光に包み込まれ始めた

「あと」

「ん?なんだ?」

「気をつけろよ、勇也」

ざわついたんだね?へ、行きなり

そして目の前も光に包まれた

どこにも人がいないんだから

なんたって

でも気持ち悪い

そしてとある町に転送された

「！」の中からみつけてか？」

樂勝

俺は索敵魔法を発動させる

キイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ

とまわりに波動が広がっていく

お、いた

それを端末に映し出す

ここから200m、

飛ぶか

俺はペリオドの羽だけを部分展開し空へとはばたく

そしてはるか先の大通りに人が歩いているのを見つめた

「やつぱ、殺さなきゃいけないのか?」

(ああ)

俺は飛び

やつの前に着陸する

「君はー!あの例の魔術師か!?」

「まあね。でも今は

『ウェッポンクリーター発動、鎌を練成』

そして握る

「お前に死を運ぶ、死神だ！」

「ふふふふ」

いきなり不自然な笑い方をし始めた

「やつと会えたよ大量の魔力を持つものに……」

は？

何をいきなり言つてやがる

異世界？

「なぜ知つてゐる！？」

「俺も他の世界の住人だからだよ」

（やはりか）

どうにうことだ！！

（こいつも少量だが魔力をもつていい。気をつけろぐるが……）

「俺の真名はシュヴァリア！！人種は獣人だ」

何を言つてゐる？

その後やつの体が変形しはじめた

「へ？」

そして3mぐらいの狼人間になった

「まじか！……！」

「はつはつは……これが俺の本当の体だ」

「くそ！」

俺はバックステップしさがる

そして先ほどまで俺がいたところに化物の拳が叩き込まれた

「死ぬのはお前だああああ

そして走つてくれる

(やはりか)

「何が！？！？」

(私の考えたとおりだった。あの体には化物が憑いておる)

「わいつきのシユヴァリエとかいつづ前前のやつがか？」

(ああそうだ)

「つてか、何で教えてくれなかつたんだ！？！？」

(100%じやなかつたからだ)

「どうすればいい？」

(殺す)

「それだけは変わらないんだな。憑かれている人はどうすればいい？」

(助けるは、助ける。でも大変だぞ？)

「殺すよつはましだ！－わいつきと教えりおおおお－－－」

（お前が今持つていい鎌でも可能だ。その鎌に魔力を溜め込め。そして弱つていいところにガツンだ！！）

「弱つていいとこって事は途中まで普通に攻撃？」

（ああそつだ。ISオッケイ、魔術もオッケイだ）

「了解」

『身体強化呪文発動、超感覚呪文発動』

『ウェッポンクリエーター発動、銃』

俺は連射型ショットガンを両手に構え

「うし、いくぞ」

「うううううやあああああーーー」

お、おぞましい

俺は初撃を前方にダッシュシュしよけ

股の間を通り背中に銃を打ち込む

ちなみに弾いつもの散弾ではない

シエトガンでも使える大きめ単発の弾だ

そしてやつは回し蹴りをくりだした！！

(RPGゲームか!!)

俺は口の前に魔法で盾を作りふわふわと飛んだが

卷之二

重
い

俺はそのまま建物に叩きつけられる

「がはつ！」

そこへ狼人間の鉄拳

ガキン！！

即時作り出した一本の剣をクロスしふせぐ

「ここまでが魔術師？」

「ウル...」

正直キツイーーーーまで強いと思つていなかつた

そして奴は片方の腕を二三えに振り上げた

おわが

「これで最後だ魔術師」

そして振り下ろされる

俺は剣で受けている腕を右に弾き

体を捻りもう片方のパン手をよける

一何！？！？」

「これで最後だシユヴァリエ」

やつが俺に放った台詞をかえす

- 155 !

炎 中級呴文發動

「イグートプリズン！！！」

奴の足元に赤色の魔方陣ができる

そして周りから炎の柱が出、狼人間に襲い掛かる

燃え尽きる

そしてチリになり人間の体だけが残った

「ふう」

そして白い部屋に戻る

そして神様を殴る

「どうせっ！」

「先に教えるやーあんな怪物やつて！」

す、すまん。確信がなかつたんだ」

「ではよかつた。」この先またあのよつた輩が出るかもしけんから

「九月一號」

な

「は？まだやるの！？！？！」

「もひ

「嘘だろおおおおおおおおおおおおおお

頭を抱え地面に打ち付ける俺

「でも今回は運がよかつたな。公になる前に閉鎖空間に閉じ込められたからな

「え？じゃあ街歩いてたらもしかしたら、出てくるかもしれないの？」

「ああわつだ

「まじかーあ、でも何で俺を狙ってきたんだ？」

「奴らはお前の魔力を狙っている。やつらにとつて魔力を持つ人間を最高の美味だからな」

「それだけ？」

「それだけ

「…………もひいよ。帰る

「ああ、わかった。じゃあな

そして気がつくと俺の寮の浴室だった

はあ疲れた

俺は学食で食べて部屋に帰っている途中だ

そういえばあの人どうなったのかな

ちゃんと帰れたかな

もういいや

ひよ

ＺＺＺＺＺＺＺＺ

????? side

「はい、はいわかっています」

電話で話している銀髪の女の子

「わかつています。今回の任務は

魔術師の確保ですね

「わかりました、はい、では」

ピッ

これもいい機会だ

教官を説得して本国でもう一度、

もう一度、じい指導をしてもらつ

そして

「お前を私は認めんぞ」

そして拳を握り締めた

第九話 平崎のお仕事（後書き）

はいできました

主人公が凄い事に・・・・・

もつそろそろヒロイン決めようかと思います

いい考えが一つて思う人は早めに案ください

第十話 強すぎだろ（前書き）

ヒロインを決定しました！

この人たちです

鈴

ラウラ

更識姉妹

山田先生

クラリッサ

です！

アンケートに答えてくれた人

ありがとうございました！！！

第十話 強すぎだろ

「今日はなんと転入生を紹介します！」

イキナリ山田先生

「「「「え？」」「」「」「」

この時期に！？！？

普通六月まできたら来学期まで待つだろ

「失礼します」

「…………」

そしてクラスに入つて来た一人を見る

その内の一人が男性だった

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。みなさんよろしくお願ひします」

「やあ……」

「やあ？」

「こ、これは

俺は前回の悲劇を忘れない

『聴覚を一時停止』

そして俺だけ無音の世界になる

田の前で女子が歓喜の声を上げているのがわかる

そして戸惑っている転入生、シャルル

そして

パンッ！

え？

呪文を貫いた？

「静かにしろ、まだ終わって言ないぞ」

鬼教官が言う

「…………挨拶をしろ」

「はい、教官」

ん？

俺はジョークでいったつもりだったのに

「ここではそう言つたな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私の事は織斑先生と呼べ」

「了解しました」

さすが軍人

ラウラ・ボーデヴィッヒ

ドイツで作られた遺伝子強化体

人工合成された遺伝子から作られた人間だ

原作を読んでるからわかるが、かなりクールだ

「ラウラ・ボーテヴィイツヒだ」

あまりにも静かなので山田先生が問う

「い、以上ですか？」

「以上だ」

「…貴様が

「

そして一夏の席の前に行き

パシング！

ラウラは一夏に、はたくをくりだした…！

（またRPGネタかよ）

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、みとめるものか

言ひぬ

「いきなり何しやがる！」

「ふん……」

そしてそっぽを向く

「ラウラ席はあの自称魔法使いの隣だ」

「お、俺は本当の魔術師だ！」

そして席を立ち反論する

「知っている。ジョークだ」

は？

あの織斑先生がジョーク？

クラス全員が唖然

織斑先生を知っている「ウラ」までもがビックリ

「ん? どうした?」

「い、 いえ。 何もあつません」

そして「ウラ」と一緒に席につく

「よ、 よりしへ。 ボーテヴィットヒさん」

「…………」「ウラ」「…………」

「んじゅよりしへ、 ラウラ」

「ああ」

案外友好的

まあ、 でも一応用心

「ではHRを終わる。 各人はすぐに着替えて第一「グラウンド」に集合。 今日は二組と合同でHISの模擬戦を行つ。 解散!」

そして即刻席を立ち急ぐ

「待て平崎、 織斑と一緒に「ユノア」の面倒を見てやつてくれないか? あのバカ一人じゃあ心配だ」

またまた弟さんを心配している

「わかりました」

そして先行した二人を追いかける

「何があつたんだ？」一夏

「いやそれが……途中で女子にみつかって」

そう俺らの目の前には女子が廊下を埋め尽くしている

「おい、やばいで一夏。これで遅れたら俺ら……」

「ああ、確実に死ぬな」

「え？ 織斑先生ってそんなに怖いの？」

シャルルが聞いてくる

「ああ。 それと自己紹介が遅れたな平崎勇也だ」

「シャルル・デュノアです。 シャルルってよんでもね

「おお、わかった。 んじゃ俺も勇也ってよんでもね
「よしこれをどうする」

そして女性陣に指をさす一夏

「俺はこ」を抜ける方法知ってるぜ」

「何！教えてくれ

「こいつあるんだ」

『転送呪文発動』

そして戦線離脱

この呪文はよつあるにてレポートだ

俺は一人を見捨て、第二アリーナの更衣室に入った

「お、早かつたな」

「ゆ、勇也。よく走」

息遣いが荒いぞ、走って来たんだろうな

「速くしろよ授業始まるぞ」

俺は着替えをすましアリーナへとむかう

案の定一夏は先生に殴られた

「本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する

なるほど

「今日は戦闘を実戦してもうつ。鳳一・オルコット一・

「な、なぜわたくしまで?」

「専用機はすぐに始められるからな」

「だからってどうして私が……」

「えー、何で私なのよ」

先生は一人に近づき

「お前らすこしばやる気をだせ。一人にいいどじろみをみせれるぞ？」

二人の目が光つた

は
?

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会ね！専用機持ちの！」

「それで相手はどういう人? わたくしは鈴さんとの勝負でもかまいませんが」

「ふふん。こいつの台詞。返り討ひよ

張り合ひ終とセシコア

「荒てるなバカども対戦相手は

平崎だ

「…………」

え？

「あ、俺ですか！？！？」

「ああ。お前だ」

「何で元代表候補生の山田先生を使わないと？」

「最初はそれだったのだが、お前の実力がある程度知つておきた
いからな」

「…………わかりました。そこまで言つのならいいでしょ。では

「いいのか？」

訊いて来る一夏

「ああ全然問題無い」

「では全生徒に告ぐ。今すぐ観客席に避難だ」

「「へ？」」

変な声を上げる俺の戦闘相手

「そ、そこまで危険何ですか？」

「ああ。IS越しでも一番弱い魔術を当てられたら体に傷がいく
ぞ」

「えー！ウソー！」

「本當だ。この私が身を持って体験したぞ」

そして生徒を誘導する織斑先生

『平崎できるだけ本氣でヤレ、だが死者をだすなよ?』

「わかつてます」

無線で返答

「死者つて……」

ビビビの鈴

『身体強化呪文発動、超感覚呪文発動』

おなじみの魔術を発動させる

ISはもううん羽根だけ

『ウーッポンクリーター発動、ダガーチェイン鍊成』

剣をにぎるとなぜかあの戦闘が脳裏に浮かび出す

そして同時にあの時の戦闘の高揚がでてくる

なぜかそれがイヤだつた

「どうしたの？ そんな顔をして？」

鈴が問う

「いや、何も無い」

「そう……」

悲しそうな顔をする鈴

『では、始めい』

ドンッ！

俺は始まつた瞬間セシリアを吹き飛ばした

鈴 side

「え？」

横を見るとセシリアが立っていた場所に彼女はいない

彼女は後ろでアリーナの壁にたたきつけられていた

「ウソ……」

「いつに驚かされるのは何度だらう

「おい、始まつたばっかしだぞ。あまり失望させないでくれ

「言ひじやない

私は青龍刀を構えた

私が覚えているのは、ここまでだった

勇也 side

俺は本当に一瞬で戦闘を終わらした

「御満足ですか？ 織斑先生？」

『本気か？』

正直に言つ

「いや、せんせん」

『そりか……次は手応えがある奴にする。行け山田先生』

『え？ わ、私ですか？ ……そ、そんな目で見ないでください、織斑先生！』、怖いです！……つう、わ、わかりました』

『すぐに山田先生がそちらに行く』

そしてピットから出て来るラファール・リヴァイブを装備した山田先生

俺は武器をかえる

『ウエッポンクリエータ発動、鎌練成』

しばらくコイツに使い馴れないとな

「それが魔術ですか？」

「はい、そうですよ先生」

『では、始めろ！』

鎌で使えるかどうかわからんが

「魔人剣！」

俺は鎌を地面に擦り上へと振り斬撃波をとばす

「わっ！」

山田先生はピックリし上へ飛翔する

「あ、危ないじゃないですか平崎くん！」

「すいませんね、先生。できるだけ本気でやれって言われてるんでね」

「ううう……」

うなだれる先生

その隙をつき

「弧月閃……」

飛び、三日月を描く様に上に切り上げる

それをリヴァイブの物理シールドで防ぐ

「ぐつ」

「さすがにキツイですか」

「まだまだです」

そして鎌をハジき距離を取りライフルを展開する先生

そして連射

俺は右、左へと動きかわす

そして先生の後ろをとる

「天雷鎌！」

鎌に雷をまとい振り下ろす

「ぐーーー！」

また距離をはなす先生

待つてたぜ

「ぐりえー奥義！鳳凰天驅！ーー！」

鎌と体を炎でまとい急降下し先生にタックルをかまして斬る

「ぐうーーーーーー！」

落ちて行く先生

「あーーー！」

俺は先生の下に回り込み

体に引き寄せる

「わやつーーー！」

驚く先生、そして暴れる

「ちよーせ、先生あんましどバタしないで！前見え無い！」

先生が騒いでるのも無理は無い

山田先生は今平崎にお姫様抱っこをされているのだ

「あわわわわわわわわ

顔を真っ赤にしている山田先生

風邪か？

（バカだな）

？何だ神様？

（イヤ、何もない）

「と、とつあえず降りしてください。」

「あ、はー」

俺は山田先生をおひや

その後皆が観客席からせりへる

「はあ。お前は相変わらず最強だな」

咳く織斑先生

paris.ウワリ

あれが魔術

強い、強いぞ、最強だ

教官に汚点を引いた織斑一夏

あれがあればヤツをひねり潰せる

それよりも魔術を使える平崎勇也とは何者だ？

勇也に興味を持ち始めたことを直観していないラウラ

（さあ、勇也は今から忙しくなうだな）

第十話 強すぎだろ（後書き）

やつとヒロインが決まったのでこれからこの道で進めていきまやー。

そして新アンケートです！

主人公のエラのセカンド・シフトを考えたのですが

武器を一個ぐらいつけた方がいいかな、と思します

つてわけでこんな武器あつたらしいなあー

とおもひの武器、案ください！

最強でもおくですー！

もしかしたらそれをベースにして武器をつくるかもしだせん

作者は想像力が乏しいのでぜひぜひ協力してくださいー！

ストーリーでもおくです

第十一話 まきいみ

「ここで我がIS学園の職員の実力を知つて欲しかつたのだがな。まあいい。これで皆もこいつの実力がわかつただろ?まやみに変なケンカを売つてオルコットの二の舞にならないようにな」

と織斑先生

「専用機持ちは織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、鳳だな。では八人グループになつて実習を行つ。各グループリーダーは専用機がやれ」

「あの、先生!」

一人の女子生徒が言つ

「平崎くんはどうするんですか?」

そうだ、俺の名前が入つてなかつた

「平崎は魔術とISを両立した戦い方をするからお前らの参考にはなれんからな。他の奴の助手でもやつてもらう。いいな、平崎」

「了解です」

返答する俺

「出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！」

そして実習が始まった

「やつたあ。織斑君と同じ班つ。苗字のおかげね」
「うー、セシリ亞かあ……さつきボロ負けしたしな」
「鳳さん、よろしくね。あとで織斑君のお話聞かせてよつ」
「チコノア君！わからないことがあつたら何でも聞いてねーちなみに私はフリーだよ！」

何地味にアピールしてんだよ

この学校の中でフリーじゃない人つているのか？

ちなみにラウラの班は

「.....」

唯一おしゃべりがない

つてか空気が重い

そこで山田先生が

「いいですかーみなさん。これから訓練機を一斑一体取りに来てください。数は打鉄が三機、リヴァイブが一機です。好きなほうを班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよ」

ちょっとできる女になつている山田先生

「平崎」

後ろから織斑先生に話しかけられる

「何ですか？」

「わよつとボーテヴィッヒの班を助けてやつてくれないか？」

ふとソチラを見る

暗い、いや黒い

機体はリヴァイヴか

「とりあえず、アイツが実験ができる気にしてくれ

「わかりやした」

そしてあの班に向かう

「あー、やつやつだー！」

のほほんわんわんの班だったのか

「ああ。J-1の眼帯少女の助手をして来た」

フンッと鼻をならしかつぱみを向へリカツカ

「助けなどこりと」

「織斑先生の命令だ」

「ぐつ……」

さすがにあの人逆らえなか

「し、しょうがない。ならば手伝え」

そう言にリ、ヴァイヴの説明をし始めるリカツカ

なんだよちやんとできるじやないか

なぜか父親で大きな皿で見てしまつ

「おに平崎」

「勇士でござ」

「……じやあ、勇士ローヴの動きをみてやつてくれ

「あこよ

軽く適切な返事をする

実習が終わり俺はラウラと一緒にリヴィア・イヴを返しに行っている

先程山田先生が手伝うと言い張っていたのだがラウラが大丈夫だの
一点張りだった

「なあ、勇也。お前はどうやってあれ程の力を手に入れたんだ？」

「あれ程つて？」

「とぼけるな！！」

いきなり大声で言われたので飛び上がった

「ISを一撃で沈める技など聞いた事が無いぞ」

「あ、あれは魔術だ」

「それは何なのだ？」

「何なのだ？と聞かれてもな。何でそれほどまでして知りたいんだ？」

「私は……力が欲しい。いつまでも頂点でいる為の……」

うつむくラウラ

あれこの人って案外インキヤラ？

「俺がなぜ魔術を使えるかはわからないけど、ラウラにとって力って何？」

「力とは……すなわち攻撃力だ」

なんか、ストレートすぎる

「あつそ……」

（おい！…平崎！…）

ん？神様か。どうしたの？そんな焦つて

（新しい奴が来たぞ！…）

は！？！？

(今すぐそつちの空間に転送する)

ちょっと待て！！！今日の前に友達が！！！

(知つたこつちやねええ、行くぞーーー！)

「ど、どうした！…こきなり

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
839
840
841
842
843
844
845
846
847
848
849
849
850
851
852
853
854
855
856
857
858
859
859
860
861
862
863
864
865
866
867
868
869
869
870
871
872
873
874
875
876
877
878
879
879
880
881
882
883
884
885
886
887
888
888
889
889
890
891
892
893
894
895
896
897
898
899
899
900
901
902
903
904
905
906
907
908
909
909
910
911
912
913
914
915
916
917
918
919
919
920
921
922
923
924
925
926
927
928
929
929
930
931
932
933
934
935
936
937
938
939
939
940
941
942
943
944
945
946
947
948
949
949
950
951
952
953
954
955
956
957
958
959
959
960
961
962
963
964
965
966
967
968
969
969
970
971
972
973
974
975
976
977
978
979
979
980
981
982
983
984
985
986
987
988
988
989
989
990
991
992
993
994
995
995
996
997
998
999
999
1000
1001
1002
1003
1004
1005
1006
1007
1008
1009
1009
1010
1011
1012
1013
1014
1015
1016
1017
1018
1019
1019
1020
1021
1022
1023
1024
1025
1026
1027
1028
1029
1029
1030
1031
1032
1033
1034
1035
1036
1037
1038
1039
1039
1040
1041
1042
1043
1044
1045
1046
1047
1048
1049
1049
1050
1051
1052
1053
1054
1055
1056
1057
1058
1059
1059
1060
1061
1062
1063
1064
1065
1066
1067
1068
1069
1069
1070
1071
1072
1073
1074
1075
1076
1077
1078
1079
1079
1080
1081
1082
1083
1084
1085
1086
1087
1088
1088
1089
1089
1090
1091
1092
1093
1094
1095
1095
1096
1097
1098
1099
1099
1100
1101
1102
1103
1104
1105
1106
1107
1108
1109
1109
1110
1111
1112
1113
1114
1115
1116
1117
1118
1119
1119
1120
1121
1122
1123
1124
1125
1126
1127
1128
1129
1129
1130
1131
1132
1133
1134
1135
1136
1137
1138
1139
1139
1140
1141
1142
1143
1144
1145
1146
1147
1148
1149
1149
1150
1151
1152
1153
1154
1155
1156
1157
1158
1159
1159
1160
1161
1162
1163
1164
1165
1166
1167
1168
1169
1169
1170
1171
1172
1173
1174
1175
1176
1177
1178
1179
1179
1180
1181
1182
1183
1184
1185
1186
1187
1188
1188
1189
1189
1190
1191
1192
1193
1194
1195
1195
1196
1197
1198
1199
1199
1200
1201
1202
1203
1204
1205
1206
1207
1208
1209
1209
1210
1211
1212
1213
1214
1215
1216
1217
1218
1219
1219
1220
1221
1222
1223
1224
1225
1226
1227
1228
1229
1229
1230
1231
1232
1233
1234
1235
1236
1237
1238
1239
1239
1240
1241
1242
1243
1244
1245
1246
1247
1248
1249
1249
1250
1251
1252
1253
1254
1255
1256
1257
1258
1259
1259
1260
1261
1262
1263
1264
1265
1266
1267
1268
1269
1269
1270
1271
1272
1273
1274
1275
1276
1277
1278
1279
1279
1280
1281
1282
1283
1284
1285
1286
1287
1288
1288
1289
1289
1290
1291
1292
1293
1294
1295
1295
1296
1297
1298
1299
1299
1300
1301
1302
1303
1304
1305
1306
1307
1308
1309
1309
1310
1311
1312
1313
1314
1315
1316
1317
1318
1319
1319
1320
1321
1322
1323
1324
1325
1326
1327
1328
1329
1329
1330
1331
1332
1333
1334
1335
1336
1337
1338
1339
1339
1340
1341
1342
1343
1344
1345
1346
1347
1348
1349
1349
1350
1351
1352
1353
1354
1355
1356
1357
1358
1359
1359
1360
1361
1362
1363
1364
1365
1366
1367
1368
1369
1369
1370
1371
1372
1373
1374
1375
1376
1377
1378
1379
1379
1380
1381
1382
1383
1384
1385
1386
1387
1388
1388
1389
1389
1390
1391
1392
1393
1394
1395
1395
1396
1397
1398
1399
1399
1400
1401
1402
1403
1404
1405
1406
1407
1408
1409
1409
1410
1411
1412
1413
1414
1415
1416
1417
1418
1419
1419
1420
1421
1422
1423
1424
1425
1426
1427
1428
1429
1429
1430
1431
1432
1433
1434
1435
1436
1437
1438
1439
1439
1440
1441
1442
1443
1444
1445
1446
1447
1448
1449
1449
1450
1451
1452
1453
1454
1455
1456
1457
1458
1459
1459
1460
1461
1462
1463
1464
1465
1466
1467
1468
1469
1469
1470
1471
1472
1473
1474
1475
1476
1477
1478
1479
1479
1480
1481
1482
1483
1484
1485
1486
1487
1488
1488
1489
1489
1490
1491
1492
1493
1494
1495
1495
1496
1497
1498
1499
1499
1500
1501
1502
1503
1504
1505
1506
1507
1508
1509
1509
1510
1511
1512
1513
1514
1515
1516
1517
1518
1519
1519
1520
1521
1522
1523
1524
1525
1526
1527
1528
1529
1529
1530
1531
1532
1533
1534
1535
1536
1537
1538
1539
1539
1540
1541
1542
1543
1544
1545
1546
1547
1548
1549
1549
1550
1551
1552
1553
1554
1555
1556
1557
1558
1559
1559
1560
1561
1562
1563
1564
1565
1566
1567
1568
1569
1569
1570
1571
1572
1573
1574
1575
1576
1577
1578
1579
1579
1580
1581
1582
1583
1584
1585
1586
1587
1588
1588
1589
1589
1590
1591
1592
1593
1594
1595
1595
1596
1597
1598
1599
1599
1600
1601
1602
1603
1604
1605
1606
1607
1608
1609
1609
1610
1611
1612
1613
1614
1615
1616
1617
1618
1619
1619
1620
1621
1622
1623
1624
1625
1626
1627
1628
1629
1629
1630
1631
1632
1633
1634
1635
1636
1637
1638
1639
1639
1640
1641
1642
1643
1644
1645
1646
1647
1648
1649
1649
1650
1651
1652
1653
1654
1655
1656
1657
1658
1659
1659
1660
1661
1662
1663
1664
1665
1666
1667
1668
1669
1669
1670
1671
1672
1673
1674
1675
1676
1677
1678
1679
1679
1680
1681
1682
1683
1684
1685
1686
1687
1688
1688
1689
1689
1690
1691
1692
1693
1694
1695
1695
1696
1697
1698
1699
1699
1700
1701
1702
1703
1704
1705
1706
1707
1708
1709
1709
1710
1711
1712
1713
1714
1715
1716
1717
1718
1719
1719
1720
1721
1722
1723
1724
1725
1726
1727
1728
1729
1729
1730
1731
1732
1733
1734
1735
1736
1737
1738
1739
1739
1740
1741
1742
1743
1744
1745
1746
1747
1748
1749
1749
1750
1751
1752
1753
1754
1755
1756
1757
1758
1759
1759
1760
1761
1762
1763
1764
1765
1766
1767
1768
1769
1769
1770
1771
1772
1773
1774
1775
1776
1777
1778
1779
1779
1780
1781
1782
1783
1784
1785
1786
1787
1788
1788
1789
1789
1790
1791
1792
1793
1794
1795
1795
1796
1797
1798
1799
1799
1800
1801
1802
1803
1804
1805
1806
1807
1808
1809
1809
1810
1811
1812
1813
1814
1815
1816
1817
1818
1819
1819
1820
1821
1822
1823
1824
1825
1826
1827
1828
1829
1829
1830
1831
1832
1833
1834
1835
1836
1837
1838
1839
1839
1840
1841
1842
1843
1844
1845
1846
1847
1848
1849
1849
1850
1851
1852
1853
1854
1855
1856
1857
1858
1859
1859
1860
1861
1862
1863
1864
1865
1866
1867
1868
1869
1869
1870
1871
1872
1873
1874
1875
1876
1877
1878
1879
1879
1880
1881
1882
1883
1884
1885
1886
1887
1888
1888
1889
1889
1890
1891
1892
1893
1894
1895
1895
1896
1897
1898
1899
1899
1900
1901
1902
1903
1904
1905
1906
1907
1908
1909
1909
1910
1911
1912
1913
1914
1915
1916
1917
1918
1919
1919
1920
1921
1922
1923
1924
1925
1926
1927
1928
1929
1929
1930
1931
1932
1933
1934
1935
1936
1937
1938
1939
1939
1940
1941
1942
1943
1944
1945
1946
1947
1948
1949
1949
1950
1951
1952
1953
1954
1955
1956
1957
1958
1959
1959
1960
1961
1962
1963
1964
1965
1966
1967
1968
1969
1969
1970
1971
1972
1973
1974
1975
1976
1977
1978
1979
1979
1980
1981
1982
1983
1984
1985
1986
1987
1988
1988
1989
1989
1990
1991
1992
1993
1994
1995
1995
1996
1997
1998
1999
1999
2000
2001
2002
2003
2004
2005
2006
2007
2008
2009
2009
2010
2011
2012
2013
2014
2015
2016
2017
2018
2019
2019
2020
2021
2022
2023
2024
2025
2026
2027
2028
2029
2029
2030
2031
2032
2033
2034
2035
2036
2037
2038
2039
2039
2040
2041
2042
2043
2044
2045
2046
2047
2048
2049
2049
2050
2051

俺らの足元には魔方陣が描かれていた

そして光だし

俺らは飲み込んだ

「まさか!!!!!!」

そして転送

俺はラウラの肩をつかみ

「おい、勇也何さつきから一人で喋っている

(バレタか。実はお前の近くにいたからだと思つ)

「嘘つけ」

(ついでだ、ついで)

「何で…………何で、ラウラがいるんだ?」

(何だ?)

「了解。それより訊きたい事がある」

(今回の敵は単体だけど、ザコを大量生産できる能力を持つてるよ)

俺が今いるのは森林地帯だった

「……いいか、ラウリーラから起る事はすべて事実だからな」

「じゃ、どうしたいきなり」

「今から俺らは意味にわからない化け物と戦う事になる」

「は？」

さすがに信じられないか

まあ、いい

『身体強化呪文発動、超感覚呪文発動』

「神様、一度でもいいからこの眼帯ちゃんに説明してくれ」

(わかつた)

ええ？まじで？

ポンッ！

とこう音とともに現われた神様

「よつ」

「本当に来ちゃつたよ

「……」

「ワラがおどるべ

「だ、誰だコイツは……！」

「今から彼方に状況説明をするガイドさんだよ」

そして、かくかくしかじか

「なるほど。お前はその異形の者と戦っているわけか

「つてかさあ、何か名前つけよつぜ、俺で

神様ナイス提案

「化け物はビッグだ？」

「そのまんますぎるだろ、ワラ」

「ヴァリアントなんてどうだ?」

「神様、それもストレーントすげるけど……響きが良いね」

「ヴァリアント、英語で異形か……」

ラウラが納得する

「それよりラウラ、お前も戦つのか?」

「あたり前だ。私だって軍人だ。銃をよこせ」

そして手を出す

「何が欲しい?」

「何でもいいのか?……じゃあ、G36をたのむ」

そして、練成

完成

「ほりょ

「これ、本物だよな」

「ああそうだぞ。何か問題があつたのか?」

「いや、何か……簡単すぎてビックリしている」

「魔術つてそんなもんだ」

俺は周りにセンサーを張り巡らしているが

ちよつぢわつき何かが入つて來た

「來た?」

「ああ、やつひやんがおでましたぜ」

「今日はザコを大量生産できる能力を持つてゐるからヤツカイだぞ。本体をたたかないと永遠と憑き出るわ」

「りょうつかい、つと」

「ああ、じやあ帰えるな」

そして、消える神様

「勇也、先程の奴何なのだ?」

「友達だ」

「神様とか言つていたが?」

「あ、あだ名だ」

「変わった名だな」

その時草むらから小さな狼が飛び出しかけたが襲い掛かろうとしたが

あけなくラウラにヘッドショットをきめられた

「や、さすがだな。軍人さん」

「私はドイツでも部隊長だったからな

「よしーー！ラウラは右からくるチビ狼をたのむー！俺は左を難ぎ払つてこる内に本体を見つけるー！」

「わかったー！」

そして俺らはお互いの背中を背中につけ周囲ながら撃つ、斬る、撃つ、斬る、撃つ、斬るを繰り返している

自分が考へても、なかなかいいコンビネーションだと思つ

「やるじやないか、勇也」

「お前もなー！」

そして最後の一匹を真つ一つに斬る

「ふう……」

「これで……終わりなのか？」

「いや、まだ。本体がみあたらない

「ふふ……でしょ、だつて私ここにいるもん」

そしてそこには木の陰から出て来る

「いんばんは。魔術師さんと、隊長さん」

「…お、お前は

「どうした知り合いか?」

「ああ、私の部隊の福隊長だ」

「え?」

「なぜだ、なぜお前が、敵何だ

クラリッサ大尉！！

「ふふつ、あそびーましょー！隊長！ーーー！」

クラリッサが不敵に笑った

第十一話 めめいみ（後書き）

クラリッサ、さうしたんな登場にしようかと迷っていたら

突然こんな感じになつた

第十一話 田を覚ませーー！

「我が名はラリス！平崎勇也、貴様の魔力を喰らひにきた！」

そしてラリスの影から小さな狼が出てきた

「またかよーーー！」

そして鎌を構える

「ま、待て！勇也ーーー！」

「どうしたー！」

「や、奴を殺すのか？」

「いや、体からヴァリアントを追いで出す

「ちよつといへ、私抜きで話すすめるのやめてくれるっ！」

ケラケラ笑いながら言うな、怖いわーーー！

狼の突進や噛みつく攻撃を避けつつ話す

しかし、これでは埒があかない

たまにラウラが援護してくれるがそれでも向こうも俺と大して状況

が変わらないはずだ

だが、彼女は必死にクラリッサに話しかける

「クラリッサ大尉！！何をしているー目を覚ませー！」

「誰それ？キヤハハハハ！！」

とチビ狼を召還しながら言う

「さつさとアイツを元に戻せえ！」

俺に怒鳴るな

「落ち着け、なんとかするから

「落ち着いていられるか！！」

歯をむき出しにして言う

なんか猫みたいだ

でもどうしよう

元に戻すのは簡単だがこのチビ狼のせいで近づけない

魔術を使って一掃するのもいいが万が一クラリッサにあたつてオーバーキルしてしまつたらな

一大事だ

「なら……おこ……ラウラ」

「何だ！」

「おまかせください」

俺に手の間に顔を近い

「わかつた、試してみる価値はあるな」

ニヤツと笑うラウラ

うし、
行くぞ！」

テウニアはテイアルを乱射しつつ突撃

なになに？突撃？くたじねえ！」

ラリスは狼を召喚だがあつてなくラウラにより打ちぬかれる

「へえ、隊長は伊達じやないねえ」

「クラリッサ大尉！元に戻れ！」

「だから無駄だつて言つてんじやん」

そして懐から拳銃をぬく

それに対してもライフルを構えるラウラ

「クラリッサ大尉、私は貴官を撃ちたくない」

「あつそ、じゃ死ね」

そしてラリスが引き金を引こうとしているとき

『ウェッポンクリエーター発動』

俺は手の内でスナイパーライフルを鍛成

「よしそのままだぞ。ラウラ」

作戦はこうだ

ラウラが突撃し氣を引く

そして俺が後ろから俺が魔力で作った弾で元に戻す

「よし…………今だ！」

俺はトリガーをしぼる

「バレバレなんだよ！」

そう言って弾丸をかわすラリス

「簡素な作戦だな！！」

いや、まだだ

そして足につけてあつたナイフを抜き構える

「なつ！」「..！」

そうこれは一重の作戦なのだ

そして今ラリスは弾丸をかわして無理な体勢にある

よけれ
ない

そいしてナイフを刺す

「ぐう」

ドスツと鈍い音をたてて刺さる

「これで終わりだ」

「ふふ……いや、まだ。私を刺しても元には戻らないぞ」

そう、俺が魔力を注いだ武器又は魔術でしか元に戻せない

でも、武器は誰にでも使える

「がつ！」

お、効いてきたようだ

「何故だ？」

「そのナイフは俺が魔力をこめたんだよ」

「おおきな世界、おおきな夢、おおきな力」

フツと笑う

「平崎勇也、お前を狙つ奴はいつぱこいるぞ。私なんかより強い奴は腐るほどいるぞ。氣をつけ……うむ」

そしてバタと倒れる

「おい！クラリッサ！」

「大丈夫だ。寝てるだけだ」

「「はあ？」」

そして俺らの目の前に神様が現われる

「グッジョブ！お一人さん…これにて終了だよ

「おい、クラリッサはどうあるんだ…

「それはこっちで手を回しておくから

「いや、どうやって…？」

「や二はシッコはないで」

いやいや、無理ですから

むつむつや氣になりますよ

「神様権限で」

「何をするんだよ…？…？」

「えええええええよ…！…！」

「んじゃ、バイバイ！」

また落

もつこい加減慣れちやつこじやなこのか?

つと思ひたりもう到着

ラウラがこまだ何が起ひつたこひれなへてキョロキョロして
い

「おこークリコチサマジーダー.」

俺の服をつかんでゆでる
や、もみの氣持ひ悪

「神様が何とかしてくれてる
たぶん

「その神様とせらも信頼できるさだいひだー.」

「こいから、落ち着けー.」

俺はラウラの腕を持つてひっぱがす

「ああ…………すまなこ」

「いいか？先ほどの戦闘は他言無用だぞ、わかつたな？」

「ああ、もちろんだ」

よし

「今は……昼休みか。時間はたいして進んでないな、なあ一緒に学食にこいつせ」

「わかつた」

その後俺らは
カフェテリアに移動した

「あのすいません」

「ん？なんだね？」

返答する学食のおばちゃん

「オハチください」

は？ラウラ何言つてんだ？

「…………ああ、おはしかい？」

そしてみせるおばちゃん

「はい、それです」

そして受け取る

このとき後ろの女子が可愛わに聞えていたのは余談である

第十一話 田を覚おやーー（後編）

武器アンケートありがとうございましたーー！

読んで楽しかったです

その内採用させていただきます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3371x/>

IS 魔法使い転生者in IS world

2011年11月7日13時04分発行